

社 具 路 遺 跡

—第4地点—

店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2004

本庄市遺跡調査会

社 具 路 遺 跡

—第4地点—

店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2004

本庄市遺跡調査会



社具路遺跡 第4地点 SK-07出土 和鏡（蓬莱双雀鏡、原寸大）

序

社具路遺跡の所在する本庄市の西富田地区は、古代集落遺跡の集中地帯として知られ、二本松遺跡、西富田遺跡、社具路遺跡などを中核に西富田遺跡群ともいべき大規模な集落群が形成されています。これらの遺跡は発掘調査の歴史も古く、早くも昭和30年3月には二本松遺跡の第1次発掘調査が実施されています。また、昭和32年12月の西富田遺跡の調査では、東日本の他地域に先がけ、すでに古墳時代中期において、それまでの炉にかわって竈（かまど）を導入していることが注目されるなど、学史上重要な遺跡群として広く知られています。社具路遺跡も、昭和55年度に、現在の国道462号線の建設にともなう発掘調査が実施されて以来、これまでに数次にわたる試掘・発掘調査が行われ、古墳時代から平安時代にかけて長期にわたって存続した集落遺跡であることが明らかになっています。また、社具路遺跡では中世墓坑群も検出されており、当時この地を領した児玉党富田氏やその館跡とされる西富田「堀の内」、さらには富田氏の勧請によるとの由緒をもつ西富田金鑽神社などとの関連が注目されるところです。本書に報告する第4地点の調査においても、古墳時代後期を中心とする住居跡が良好な状態で確認され、一方中世の墓坑からは和鏡や北宋銭の出土を見るなど、遺跡の性格を解明するうえにおいて、さらなる新知見を得ることができました。

今後は、本書が学術研究をはじめ、生涯学習、学校教育の場に広く活用されるとともに、さらなる埋蔵文化財保護の推進に寄与することを希望する次第です。

最後になりましたが、当遺跡調査会の埋蔵文化財保存事業に格別のご理解を賜り、現地発掘調査から、資料の整理調査、さらには本書の刊行に至るまで多大なご協力を頂戴した渡辺芳治郎様には、ここにあらためて深甚の謝意を表する次第です。また、調査に際してご指導、ご教示を賜りました方々、発掘現場で直接作業の労にあたられた皆様に心から御礼を申し上げます。

平成16年3月

本庄市遺跡調査会

会長 福島 巖

例 言

1. 本書は、埼玉県本庄市大字西富田^{にしとみだ かなきら}字金鑽^{しやくじ}409番1に所在する社具路遺跡第4地点の発掘調査報告書である。
2. 調査は、本庄市大字西富田410番地渡辺芳治郎氏が計画する店舗建設に伴い、事前の記録保存を目的として本庄市遺跡調査会が実施したものである。
3. 発掘調査は、社具路遺跡の1,984㎡を対象として実施した。
4. 発掘調査期間は以下のとおりである。

自 平成9年8月11日
至 平成9年9月15日
5. 発掘調査担当者は以下のとおりである。

本庄市遺跡調査会 調査員 増田一裕
6. 整理調査期間は以下のとおりである。

自 平成9年9月15日
至 平成16年3月31日
7. 整理調査担当者は以下のとおりである。

本庄市遺跡調査会 調査員 太田博之
8. 整理調査は、有限会社毛野考古学研究所に委託した。
9. 本文の執筆は、Iを本庄市教育委員会事務局が、遺物観察表の作成を有山径世(有限会社毛野考古学研究所調査部調査研究員)が、その他を和久裕昭(有限会社毛野考古学研究所調査部主任調査研究員)が担当した。
10. 本書の編集は和久が担当した。
11. 本書に掲載した出土遺物、遺構および遺物の実測図ならびに写真、その他報告書に係る資料は、本庄市教育委員会において保管している。
12. 発掘調査から整理調査、報告書の刊行に至るまで、以下の方々から貴重なご助言、ご指導、ご協力を賜りました。ご芳名を記し感謝申し上げます(順不同・敬称略)。

大熊季広 金子彰男 車崎正彦 恋河内昭彦 昆 彰生 坂本和俊 杉山晋作 鈴木徳雄
外尾常人 田村 誠 徳山寿樹 鳥羽政之 長井正欣 中沢良一 長瀧歳康 日高 慎
松澤浩一 丸山 修 矢内 勲
13. 社具路遺跡第4地点の調査にかかる本庄市遺跡調査会の組織は、以下のとおりである(平成15年度現在)。

会 長	福 島 巖	[本庄市教育委員会教育長]
理 事	掛 斐 龍一	[本庄市教育委員会事務局長(会長代理)]
同	柴崎起三雄	[本庄市文化財保護審議委員]
同	野村 廣久	[同]
監 事	亀田 能紀	[本庄市行政委員会事務局長]
同	齊藤 貞子	[本 庄 市 会 計 課 長]
幹 事	吉田 敬一	[社 会 教 育 課 長]
同	桜場 幸男	[社 会 教 育 課 長 補 佐]
同	吉 田 稔	[社会教育課文化財保護係長]
同	太田 博之	[社会教育課文化財保護係主査]
同	我妻 浩子	[社会教育課文化財保護係主査]
同	松 本 完	[社 会 教 育 課 臨 時 職 員]
同	町田奈緒子	[同]
調 査 員	太田 博之	[社会教育課文化財保護係主査]
同	松 本 完	[社 会 教 育 課 臨 時 職 員]
同	町田奈緒子	[同]

凡 例

1. 本書所収の各種遺構図における方位針は、座標北を示す。
2. 各遺構断面図に付記した水準数値は、東京湾平均海面(T. P.)に基づく海拔を m 単位にて示したものである。
3. 本書掲載の地形図については、各図の隅に出典を明記してある。
4. 本調査における遺構名称は下記の記号で示し、本書掲載の本文、挿図、写真図版中の遺構名称も同一の記号を用いた。
SI・・・ 竪穴住居跡 SD・・・ 溝状遺構 SK・・・ 土坑
5. 本書掲載の遺構図ならびに遺物実測図の縮尺は、原則として以下のとおりである。個別の図におけるスケールにも、縮尺を明示してある。
[遺構図]
遺跡全体図・・・ 1 : 200 SI、SK・・・ 1 : 60
[遺物実測図]
銭貨・和鏡・・・ 1 : 2 その他・・・ 1 : 4
6. 遺構観察表(表9・17)中、および本文中の遺構に関する事実記載においては、単位として m を用い、小数点以下第2位までの数値を四捨五入のうえ示している。
7. 遺物観察表中の単位については、法量に cm、重さに g を用いている。[]内の数値は推定値、()内の数値は最大残存値をそれぞれ示す。
8. 本書にて引用、ないし制作にあたって参照した文献については、その主なものを本文末にまとめて記載した。
9. 本書巻末に掲げた報告書抄録では、遺跡の位置表示として、2002(平成14)年4月1日施行の測量法改正で採用された世界測地系(新国家座標)に基づく緯度・経度、および改正以前の日本測地系(旧国家座標)に拠った緯度・経度の両者を併記している。

目 次

本庄市遺跡調査会会長 福島 巖

序

例 言

凡 例

目 次

I 調査に至る経緯	1
II 地理的・歴史的環境	2
1 地理的環境	2
2 歴史的環境	2
III 調査の方法と経過	7
1 調査の方法	7
2 調査の経過	7
IV 調査の成果	9
1 遺跡の概要	9
2 検出された遺構と遺物	10
(1) 主要な住居跡	10
(2) その他の住居跡	24
(3) 主要な土坑	27
(4) その他の遺構	31
V まとめ	34

写真図版

報告書抄録

挿図目次

図 1 埼玉県の地形	2	図22 SI-13 出土遺物	21
図 2 遺跡の位置	3	図23 SI-14	22
図 3 本庄市内の主な遺跡	4	図24 SI-14 出土遺物	22
図 4 遺跡全体図	8	図25 SI-25	22
図 5 調査区南東部の遺構	9	図26 SI-25 出土遺物	23
図 6 SI-01	10	図27 SI-26	23
図 7 SI-01 出土遺物	11	図28 SI-28	24
図 8 SI-02	12	図29 SI-28 出土遺物	24
図 9 SI-02 出土遺物	12	図30 SI-16 出土遺物	25
図10 SI-03	13	図31 SI-17 出土遺物	26
図11 SI-04	14	図32 SI-22 出土遺物	27
図12 SI-05	14	図33 調査区北部の遺構	28
図13 SI-06	15	図34 SK-01	29
図14 SI-07	16	図35 SK-01 出土遺物	29
図15 SI-07 出土遺物	16	図36 SK-07	29
図16 SI-08	17	図37 SK-07 出土遺物	29
図17 SI-09	18	図38 SK-12	30
図18 SI-10	18	図39 SK-12 出土遺物	30
図19 SI-11	19	図40 SK-18	31
図20 SI-11 出土遺物	19	図41 SK-18 出土遺物	31
図21 SI-13	20	図42 その他の土坑	32

表目次

表 1 SI-01 出土遺物観察表	11	表10 SI-16 出土遺物観察表	25
表 2 SI-02 出土遺物観察表	12	表11 SI-17 出土遺物観察表	26
表 3 SI-07 出土遺物観察表	16	表12 SI-22 出土遺物観察表	27
表 4 SI-11 出土遺物観察表	19	表13 SK-01 出土遺物観察表	29
表 5 SI-13 出土遺物観察表	21	表14 SK-07 出土遺物観察表	30
表 6 SI-14 出土遺物観察表	22	表15 SK-12 出土遺物観察表	30
表 7 SI-25 出土遺物観察表	23	表16 SK-18 出土遺物観察表	31
表 8 SI-28 出土遺物観察表	24	表17 その他の土坑一覧表	33
表 9 その他の住居跡観察表	24		

写真図版目次

写真図版 1	遺跡の位置および周辺の地形	SK-11 (2)・(3)
写真図版 2	調査区南東部 住居跡など (1) 西から	SK-11 (4)
	調査区南東部 住居跡など (2) 南から	写真図版12 SK-12
	調査区南東部 住居跡など (3) 東から	SK-13 (1)
写真図版 3	調査区南東部 住居跡など (4) 北東から	SK-13 (2)
	調査区南東部 住居跡など (5) 北西から	写真図版13 SK-15
	SI-01	SK-16
写真図版 4	SI-01 カマド周辺	SK-18 (1)
	SI-01 遺物出土状況 (1)	写真図版14 SK-18 (2)
	SI-01 遺物出土状況 (2)	SK-22
写真図版 5	SI-04 カマド (1)	SD-02
	SI-04 カマド (2)	写真図版15 SD-06
	SI-04 遺物出土状況	作業風景 (SI-01)
写真図版 6	SI-05 遺物出土状況	写真図版16 SI-01 出土遺物
	[左]SI-07 / [右]SI-08	SI-02 出土遺物
	SI-11	SI-07 出土遺物
写真図版 7	SI-11 遺物出土状況	SI-11 出土遺物
	[左]SI-28 / [右]SI-26	SI-13 出土遺物
	SI-13 カマド周辺	SI-14 出土遺物
写真図版 8	SI-20	写真図版17 SI-16 出土遺物
	[左]SI-22・17 / [右]SI-27	SI-17 出土遺物
	SI-13 周辺	写真図版18 SI-22 出土遺物
写真図版 9	調査区北西部 住居跡・墓など 北から	SI-25 出土遺物
	SK-05 (1)	SI-28 出土遺物
	SK-05 (2)	SK-01 出土遺物
写真図版10	SK-07 (1)	SK-07 出土遺物
	SK-07 (2)	SK-12 出土遺物
	SK-08・09	SK-18 出土遺物
写真図版11	SK-11 (1)	

I 調査に至る経緯

1997(平成9)年3月7日、本庄市大字西富田^{にしとみだ}410番地渡辺芳治郎氏から、本庄市大字西富田^{かなさら}字金鑽409番1および409番8の土地、1,984㎡に店舗建設の計画があり、このことにかかる『埋蔵文化財の所在及び取扱いについて』の照会が、本庄市教育委員会に提出された。本庄市教育委員会で埼玉県教育委員会発行の『本庄市遺跡分布地図』をもとに、同地の埋蔵文化財包蔵地の有無を調査したところ、当該の事業計画地には、周知の埋蔵文化財包蔵地社具路遺跡(53-093)が存在することが判明した。

社具路遺跡は、1980(昭和55)年度に県道建設に伴い第1次発掘調査が実施されて以来、1997(平成9)年度の時点までに数次の試掘・発掘調査が行われ、それらの成果によって、古墳時代から平安時代にかけての集落跡と中世の墓地からなる複合遺跡としての性格が明らかになっていた。一方で、遺跡の範囲、遺構分布の状態もほぼ解明され、照会のあった駐車場予定地については、近接地点における調査結果などから、濃密な遺構の分布が予測された。

本庄市教育委員会では、以上のような状況をふまえ、当該事業計画地について、埋蔵文化財の試掘調査を行うこととし、1997年4月24日から5月16日までの期間に現地調査を実施した。その結果、当該埋蔵文化財包蔵地において、古墳時代から平安時代にかけての集落跡および中世の墓坑群の存在を確認し、土師器坏、甕、北宋銭などの遺物を検出した。

本庄市教育委員会では、以上の試掘調査の結果に基づいて、『埋蔵文化財の所在及び取扱いについて』の回答を事業者あて送付し、1. 協議のあった土地については周知の埋蔵文化財包蔵地である社具路遺跡が存在することから現状保存が望ましいこと、2. やむを得ず現状変更を実施する場合は、文化財保護法第57条2第1項の規定に基づき埼玉県教育委員会あて埋蔵文化財発掘の届出を提出すること、3. 埋蔵文化財発掘の届出を提出の後は埼玉県教育委員会の指示に従い、当該埋蔵文化財の保護に万全を期すこと、4. 本回答後は関係機関との協議を徹底することの旨を通知した。

その後の協議の結果、他に店舗建設の適地がなく、渡辺芳治郎氏との間で契約を締結したうえで本庄市遺跡調査会が調査主体となり、発掘調査を実施して記録保存の措置をとることとなった。なお、発掘調査の対象は店舗建物の基礎部分にとどめ、駐車場その他埋蔵文化財への掘削が及ばない範囲は、必要な盛土などを行い、極力現状での保存を図ることとした。

発掘調査のための手続きは、1997年8月5日付で、事業者から文化財保護法第57条2第1項の規定による埋蔵文化財発掘の届出が提出され、本庄市教育委員会ではこれを受けて、同年8月5日付本教社発第123号で埋蔵文化財発掘の届出の取扱いについての副申を添え、同届出を同日付本教社発第122号で埼玉県教育委員会あて進達した。また、同日付本遺会発第1号で本庄市遺跡調査会から埋蔵文化財発掘調査の届出が提出され、本庄市教育委員会ではこれを受けて、同日付本教社発第122号で埼玉県教育委員会あて進達した。現地における発掘調査は、1997年8月11日から同年9月15日までの期間で実施した。

II 地理的・歴史的環境

1 地理的環境

本庄市は、埼玉県北西部に位置する人口約6万1,000人の中核都市である。埼玉県に属しながら、気候、風土、経済、文化などの各側面において、古くから隣接する群馬県南西部との関連が深い。近年では拠点法の制定をうけ、2004（平成16）年度の上越新幹線駅開業に前後して各種の開発事業が進められている。

市の北東部では、烏川などに由来する氾濫原（本庄低地）に南接する形で、本庄台地が位置する。本庄台地は、洪積世末期の立川期に神流川の堆積作用によって形成された扇状地性台地である。おおむね砂礫層を主体とするが、粘土層や粘質ローム層などが複雑に堆積しており、地点によってその様相は変化する。扇頂部は児玉郡神川村大字寄島地区にあり、扇端部は本庄市市街地北縁、さらには同市大字東五十子付近を通る。市の中央付近を東流する女堀川の浸食により、本庄低地と接する台地北側では河岸段丘が形成されている。段丘崖の高さは4～12m、崖線は8km前後にわたって東西に連なる。社具路遺跡は、この本庄台地の中心域、女堀川を南に300～500m隔てた箇所に位置する。

2 歴史的環境

現在、本庄市においては、遺物散布地を含めた弥生時代以前、および近世以降の遺跡は少数にとどまる一方、古墳時代、奈良・平安時代、中世の遺跡が多く周知されている。以下、市域における各時代の主要な遺跡、および社具路遺跡周辺の概況について記す。

〔旧石器時代〕 明確に遺構と認定しうる事例は、いまだ知られていない。宥勝寺北裏遺跡の調査にてローム層中より剥片が出ているが、これが現在までのところ市内唯一の包含層出土遺物である。他の遺物は、

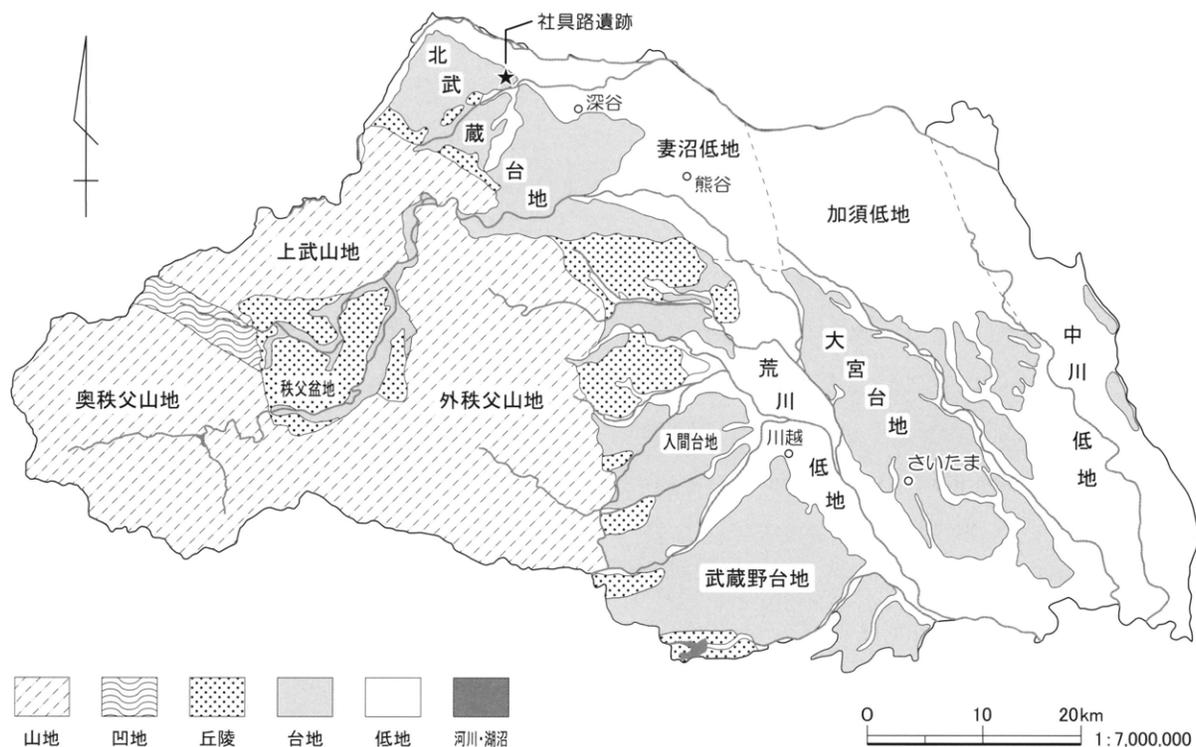


図1 埼玉県の地形

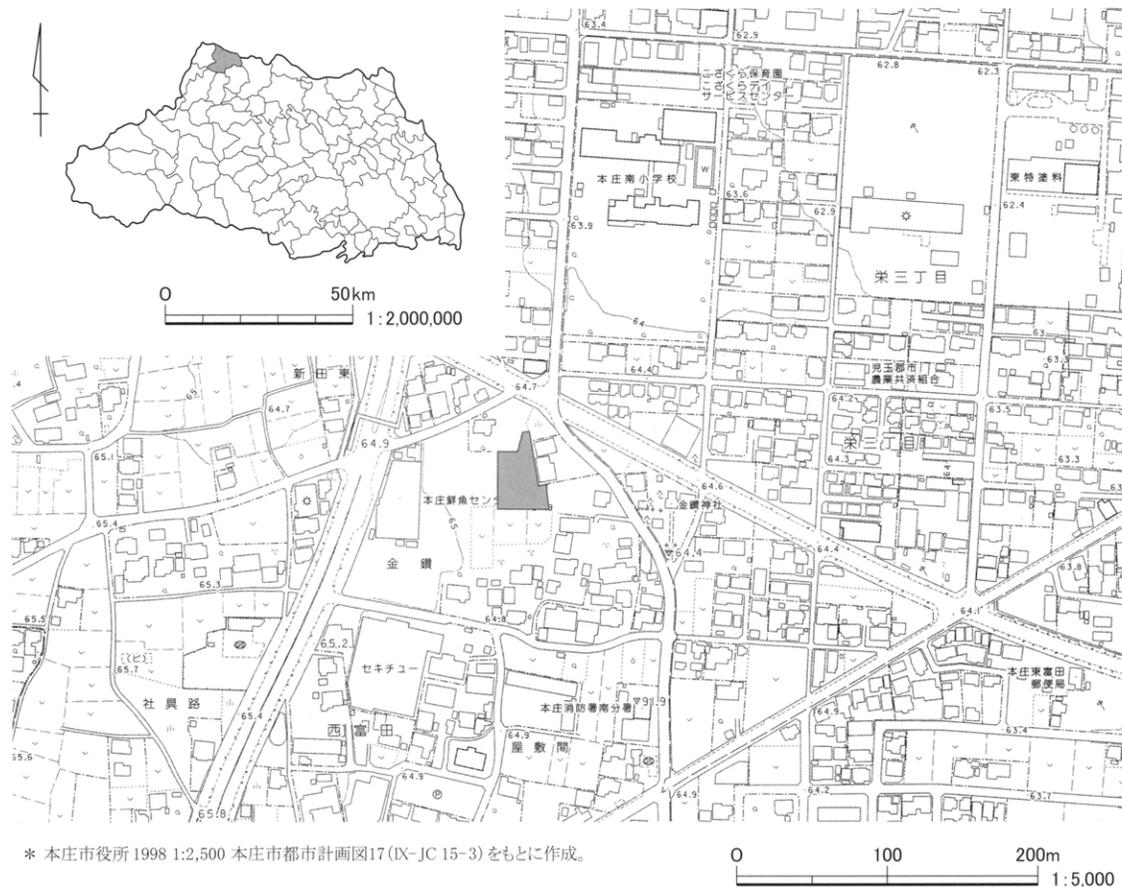


図2 遺跡の位置

古墳時代の調査などにおいて混入といった形で副次的に見つかっている。石神境遺跡、社具路遺跡、西五十子田端遺跡にてナイフ形石器、古川端遺跡で細石刃、彫器、剥片、三空山遺跡で船底形石器と尖頭器、大久保山Ⅰ遺跡にて石核、柏一丁目3番地内では尖頭器が、それぞれ採集されている。

〔縄文時代〕 将監塚^{しょうげんづか}、西富田前田の両遺跡で集落跡が確認されている。将監塚遺跡では、中期を中心とする多数の住居跡が検出された。

図3で示した遺跡にて、主に中期から後期にかけての遺物の散布が知られる。このうち宥勝寺北裏と大久保山Aの両遺跡は、晩期を除くほとんどの時期の遺物を包蔵する遺跡として特筆されよう。

草創期の資料が比較的そろっているのも、市域の特徴である。笠ヶ谷戸遺跡、将監塚遺跡では、有舌尖頭器が単独で、また大字小島の万年寺地区からは、草創期特有の大形打製石斧が出土した。宥勝寺北裏遺跡では、小片ながら爪形文土器 12 点と多縄文系土器約 20 点、および早期の押型文土器の破片 200 点弱が採集されている。

〔弥生時代〕 大久保山周辺に遺跡が比較的多く分布する。大久保山A遺跡では、中期の再葬墓とおぼしき土坑1基、大久保山ⅢB遺跡で後期の住居跡2軒、同ⅣA遺跡にて同じく4軒、近接する山根遺跡でも住居跡の調査例がある。このほか、宥勝寺北裏遺跡で中・後期、下野堂^{しもんどう}地区にて後期の土器破片がそれぞれ見つかっている。児玉郡域における当該期の遺跡は、概して丘陵上や谷筋周辺に立地する傾向をもつ。しかし、本庄市内では同様の地形が少なく、その点が居住地選定に際しての制約となっていた可能性も考えられる。

〔古墳時代〕 4世紀（いわゆる五領式期）の集落遺跡は、女堀川中流域や男堀川周辺に集中する傾向

遺跡地名一覧

縄文時代遺物出土地

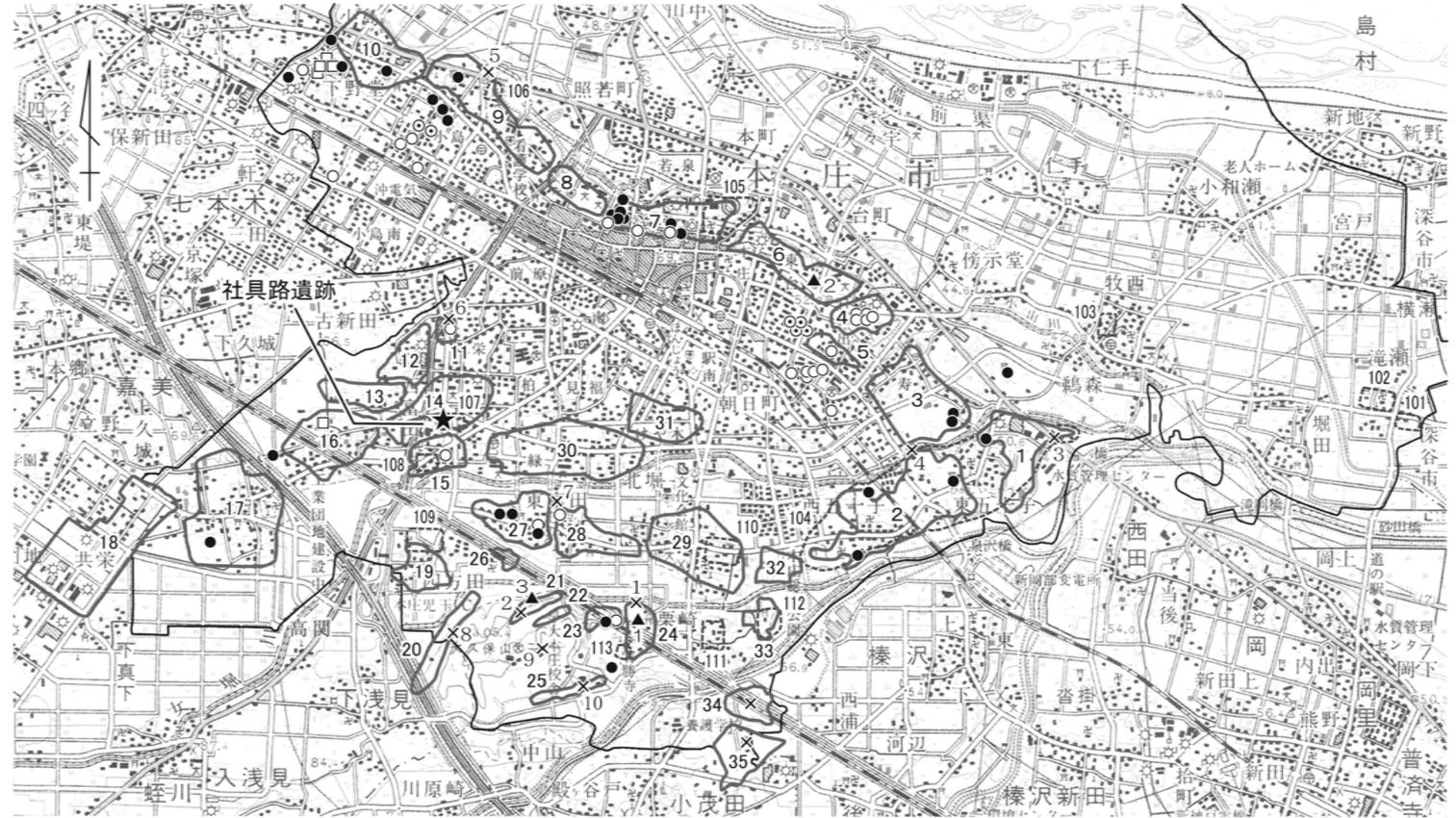
- 1 宍勝寺北裏遺跡 (早期～後期)
- 2 大久保山A遺跡 (早期～後期)
- 3 東五十子遺跡 (中期～後期)
- 4 諏訪新田遺跡 (中期)
- 5 小島遺跡 (中期)
- 6 二本松遺跡 (中期)
- 7 公卿塚古墳 (後期)
- 8 四方田字前山
- 9 大久保山B遺跡 (中期)
- 10 西谷遺跡 (前期)

弥生時代遺物出土地

- 1 宍勝寺北裏遺跡
- 2 薬師堂遺跡
- 3 大久保山A遺跡

古墳時代～古代集落

- 1 東五十子遺跡 (4～10C)
- 2 西五十子遺跡 (6C～)
- 3 諏訪新田遺跡 (4～8C)
- 4 御堂坂遺跡 (6C～)
- 5 大塚遺跡 (6～10C)
- 6 薬師堂遺跡 (5～10C)
- 7 本町遺跡 (5C～)
- 8 北原遺跡 (6C～)
- 9 小島遺跡 (4～8C)
- 10 万年寺遺跡 (6～10C)
- 11 二本松遺跡 (5C)
- 12 夏目遺跡 (5～7C)
- 13 西富田新田遺跡 (5C)
- 14 薬師遺跡 (6～10C)
- 15 本郷遺跡 (5～7C)
- 16 東今井遺跡 (6C～)
- 17 西今井遺跡 (6C～)
- 18 北浜和将監塚・古井戸遺跡 (6C～)
- 19 四方田遺跡 (5C～)
- 20 山根遺跡 (5C～)
- 21 大久保山A遺跡 (5C～)
- 22 大久保山C遺跡 (6～7C)



- × 縄文時代遺物出土地 ▲ 弥生時代遺物出土地 □ 方形周溝墓 ● 古墳 (完存)
 ○ 古墳 (半壊) ○ 古墳 (痕跡) □ 古墳時代～古代集落 □ 城跡・館跡・墳墓址



- | | | | | | | |
|------------------|------------------|------------------|-----------|------------|-----------|--------------|
| 23 前山遺跡 (5C～) | 29 本田遺跡 (6～8C) | 35 川原山遺跡 (5C～) | 104 五十子陣跡 | 107 富田氏館跡 | 110 北堀館跡 | 113 東谷中中世墳墓址 |
| 24 宍勝寺遺跡 (5～10C) | 30 伊丹堂遺跡 (6～7C) | | 105 本庄城跡 | 108 富田氏館跡 | 111 栗崎館跡 | |
| 25 西谷遺跡 (6～7C) | 31 笠ヶ谷戸遺跡 (5C～) | 城跡・館跡・墳墓址 | 106 小島氏館跡 | 109 四方田氏館跡 | 112 東本庄館跡 | |
| 26 下田遺跡 (6C～) | 32 諏訪台遺跡 (6～10C) | | | | | |
| 27 東富田遺跡 (5C～) | 33 東本庄遺跡 (6～10C) | 101 滝瀬陣屋跡 | | | | |
| 28 久下塚遺跡 (5C～) | 34 古川端遺跡 (5C～) | 102 滝瀬氏館跡 | | | | |
| | | 103 牧西氏館跡 | | | | |

* 国土地理院理 1998 1:50,000 地形図 NJ-54-30-15(宇都宮15号) 高崎、および本庄市 1976 をもとに作成。同書付図中の掲載番号を流用している関係上、遺跡の番号が不連続となっている。

図3 本庄市内の主な遺跡

を示す。一方、5世紀後半に入ると、大字西富田地区と本庄段丘崖地区を中心に、集落遺跡が急増する。こうした動向は、首長墓としての古墳葬制の採用、初期カマドの導入、加えて須恵器模倣品や大形甎の出現が示唆する社会的な変化の影響を受け、弥生時代以来の選地が変容していく過程ととらえることができよう。なお、西富田二本松遺跡は、関東地方における初期カマド導入の住居跡が昭和30年代に調査された事例として、学史的にも著名である。

6・7世紀（いわゆる鬼高式期）には、遺跡数がさらに増加する。6世紀に属する夏目遺跡第51号住居跡のカマドからは、祭祀に用いられた可能性のある高坏や三連小埴が出土している。カマド構築時に袖へ白玉や勾玉を埋納する風習が顕著になるのはこのころである。なお、東五十子城跡遺跡の第10号住居跡からは、玉類とともに多量の鉄製工具が出土しており、注意される。7世紀に入ると、遺跡数はひとつのピークを迎え、各遺跡における遺構の重複も顕著となる。いまい台産業団地造成に際する発掘調査では、一遺跡でじつに333軒もの住居跡が検出された。薬師元屋舗遺跡第24号住居跡では、U字状のクワ先が出土している。

方形周溝墓は、弥生時代のものが市域においてほぼ皆無なのに対し、当該期の類例が今井諏訪遺跡（4世紀）と万年寺遺跡（4・5世紀）にて多数検出されている。ただし、後者の例に関しては、一辺30m以上で低墳丘をもつものもあり、一部方墳も含まれている可能性が高い。

市内では、かつて200基以上の古墳が存在したとみられるが、今や盛土が残るものにして10基あまりを数えるにすぎない。これらのうち、八幡山古墳、^{こかげやま}蚕影山古墳、山ノ神古墳は、市指定文化財として保存されている。

児玉郡では古式古墳が多く知られ、本庄市内でも5世紀前半に築造されたとみられる事例が点在する。前山1号墳（前方後円墳）が最古とされ、木棺直葬で埴輪の用いられていない前山2号墳（方墳）がこれに次ぐ。小形埴と滑石製模造品の出土をみる万年寺つつじ山古墳（方墳）、これに隣接する万年寺八幡山古墳も埴輪を伴わない。やや後続の^{くげづか}公卿塚古墳は直径69mと推測される大型円墳で、格子目叩き技法の円筒埴輪と形象埴輪、滑石製模造品が出土している。このほか、埼玉県選定重要遺跡の旭・^{おじま}小島古墳群は、古墳の分布数（86基）において特筆されよう。また、塚合古墳群、西五十子古墳群、東五十子古墳群については、古式群集墳の段階から形成が始まっていることが明らかになりつつある。

〔奈良・平安時代〕 ひき続き集落遺跡が多数に上る一方で、遺構の分布密度がやや散漫となる。将監塚遺跡や本庄城址内遺跡、大久保山遺跡の調査成果より、これらが計画的に建設された村落である可能性が指摘されている。計画性といえば、条里制遺構も重要な当該期遺構として挙げられよう。律令制のもと、地域集団単位でなされた大規模土木工事の痕跡で、水路が付随する。本庄市周辺の水路は、幹となる水路から順次枝分かれし（猿尾状水路）、水路が立体的に交差する（樋越し構造）点に特徴がある。産業団地造成や土地改良事業がさかんになる以前、女堀川流域には県内有数の条里遺構が分布し、一部はごく最近まで活用されていた。

特徴的な遺物を伴う遺跡としては、文字線刻紡錘車が見つかった薬師元屋舗遺跡と田端屋敷遺跡がまず挙げられる。前者第51号住居跡出土の紡錘車には、「武蔵野国児玉郡草田郷戸主大田部身万呂」の線刻があり、『和名抄』高山寺本に見える草田郷の所在を数百年ぶりに立証する文字資料となった。東五十子の田端屋敷遺跡からは、県内で最多文字数の刻まれた紡錘車が発見された。このほか、天神林Ⅱ遺跡第2号住居跡では、金属製品を模倣した可能性のある三足付き鍋状土器、本庄城址内遺跡第10号住居跡の床面からは、985年初鑄の唐国通宝がそれぞれ出土している。

〔中・近世〕 律令制が崩壊しつつあった古代末、市周辺では武蔵七党のひとつである児玉党が結成された。その後、児玉党の本流と分家は、児玉郡内に多くの居館を構え、それらが（伝）四方田氏館跡、（伝）富田氏館跡、（伝）今井氏館跡、栗崎館跡、本田館跡、東本庄館跡として残っている。ただし、いずれについても、本格的な発掘調査はこれまで行われていない。

やや下って15世紀後半、関東管領上杉氏と古河公方足利氏の対立が顕在化し、武蔵・上野を領する上杉方は、拠点として五十子陣（城）を構築した。以来、1478（文明10）年の上杉氏と古河公方との和睦がなるまで、同陣周辺はおよそ20年にわたって、五十子の合戦に代表されるような戦乱の舞台となる。城跡という字名を現在に残す五十子陣は、久しく実態不明の史跡とされていた。しかし近年、広域圏清掃センターの建設に伴い、3年にわたる発掘調査が実施され、陣の中心ではないものの、関連遺構や大量の土師器小皿、輸入陶磁器などが発見されている。

一方、大久保山寺院跡にほど近い東谷中世墓群では、未調査ながら古瀬戸や鉄釉の壺が採集されている。大久保山寺院跡は、児玉党本家である庄（荘）氏の菩提寺となる可能性があり、両遺跡の関連が注目されている。

五十子陣廃絶の前後より、在地の庄氏は本宗家を本庄と呼ぶようになった。これが、本庄市の名のゆえんである。本庄氏は、東本庄にあった拠点を1556（弘治2）年に現在の市役所付近へ移して本庄城としたが、豊臣氏による小田原攻めの際、後北条氏にくみしたかどで滅亡に追いこまれてしまう。まもなく江戸の世となり、本庄城はわずか56年で廃城に至る。その後の同城周辺は、むしろ中山道沿いの宿場町として、今日の本庄市発展の礎を築いていくことになる。なお、市内において近世を対象として調査が行われた例はいまだ稀少にとどまっており、他の時代の調査中に民家遺構や近世墓、陶磁器などが副次的に検出されるのみである。

〔近代〕 近世同様、対象は限定されるものの、埋蔵文化財の観点から近・現代史に光を当てる試みがいくつか行われている。市役所新庁舎建設に先がけては製糸工場跡が調査され、施設の構造による問題から明確な遺構は検出されなかったものの、ガラス瓶や養蚕関係の陶磁器が多量に出土した。日本鉄道本庄駅開業以来、近代の本庄は養蚕の町であり、製糸工場とその煙突は、町の景観の一部をなすものであった。また、神保原駅から小島万年寺を經由するトロッコ軌道跡は、烏川の砂利を採取する目的で敷設されたものであるが、この一部でも調査が行われている、さらに、戦時中の遺跡として、青葉隊の塹壕跡、排水施設と薬きょうが確認された児玉飛行場が挙げられる。

〔社具路遺跡周辺の概況〕 先述のとおり、社具路遺跡では、別地点にて後期旧石器時代のナイフ形石器が採集されている。また、二本松遺跡にて縄文時代中期、公卿塚古墳では同後期の遺物の散布が確認されている。とはいえ、目下のところ先史時代に関連した調査例はごく限られているのが実状である。

一方で、本遺跡周辺は、主に古墳時代から奈良・平安時代にかけての集落跡が密集する区域として知られている。半径1km以内に限っても、薬師、薬師元屋舗、（西富田）本郷、（西富田）二本松、夏目、西富田新田、東今井、四方田、下田、東富田、伊丹堂の各集落遺跡が分布する。近年、周辺遺跡の調査例が増加したことから、個別の断片的な調査成果を概括し、往時の集落のありかたを復原する道がしだいに開かれつつある。現状では、旧河道や野水流路の位置などの微地形にかんがみ、5、6の集落群が相前後して存立していた旨の予察が提示されている（増田1997）。それによると、本遺跡のうち大半の地点は、東方の薬師遺跡、薬師元屋舗とあわせていわゆる「西富田金鑽古代集落」を形成し、南部の第1地点は西富田本郷遺跡とともに「西富田本郷古代集落」として把握されるという。

なお、二本松遺跡は、関東地方における初期カマド導入の住居跡が昭和30年代に本格調査された事例として、学史的にも著名である。また、周辺区域はかねてより平安時代の児玉郡草田郷の一候補地と目されていたが、先述したように、薬師元屋舗遺跡の第51号住居跡より「武蔵野国児玉郡草田郷戸主大田部身万呂」と線刻された紡錘車が出土し、くだんの推測が立証されるに至った。

Ⅲ 調査の方法と経過

1 調査の方法

試掘調査の成果などを参考にし、遺構確認面をローム層上面と定め、その直上までは重機を用いて掘削した。その後、遺構の確認と調査は人力にて行った。現地実測の基準として方眼基準杭と基準点を設置し、各種遺構図は手実測により縮尺1/20で作成した。遺構の写真撮影には、35mmのモノクロ、カラーネガ、リバーサル各フィルムを使用した。

調査にあたっては、建物の基礎に該当する部分を主な対象としたため、範囲の大半においてトレンチ調査の方法がとられることとなった。ただし、事業対象範囲の南東部では、建設が予定される建物の柱の間隔が狭く、また試掘調査にて遺構が密集していることが判明していたため、全面調査を実施した。さらに、北部は遺構検出面が浅いことに加え、浄化用埋設予定地であること、試掘調査にて墓地が確認されていることから、ここでもやはり全面調査を行った。

遺物の取り扱いについては、接合にセメダインC、復元に石膏、写真撮影に35mmおよび6×7判モノクロフィルムをそれぞれ使用した。

2 調査の経過

発掘調査は、1997（平成9）年8月11日から同年9月15日にかけて実施された。調査期間の後半に入ると雨天が多くなり、作業はしばしば難航したが、調査補助員の尽力により、全体としてはおおむね順調な経過であった。調査終了後、調査区を埋め戻して事業者側へ引き渡しを行った。

整理調査は同年9月3日から2004（平成16）年3月31日にかけて実施し、同年3月31日付で報告書を刊行した。

以下、現地調査の推移について概要を記しておく。

- 8月11日（月） 晴れ トレンチ設定。住居跡多数の存在が予測される調査区南東部から、表土掘削を開始。
- 8月19日（火） 晴れ 調査区南東部から、人力掘削を開始。
- 8月21日（木） くもり 遺構確認作業が本格化。
- 8月25日（月） くもり 遺構内部の開掘を始める。ひき続き調査区南東部に重点を置く。
- 8月27日（水） 晴れ 調査区南東部の写真撮影。
- 8月29日（金） 晴れときどきくもり 調査区南東部の遺構の断面実測を開始。
- 9月2日（火） 晴れ 遺構平面実測用の測量杭設定。調査区南東部の遺構、ほぼ完掘。
- 9月4日（木） 晴れのちくもり トレンチ調査部分の住居跡と並行して、調査区北部の調査を開始。土坑より、人骨、古銭などが出土。
- 9月5日（金） くもりときどき晴れ 主として遺構写真撮影。

- 9月10日（水） 晴れ ときどきくもり 調査の中心、調査区北部へ。遺構開掘と並行して平面実測を進める。
- 9月11日（木） 晴れ ときどきくもり 遺構平面図作成と土坑出土人骨の精査。
- 9月14日（日） くもりのち雨 調査区北部の土坑出土人骨の取り上げ作業が中心。SK-07の覆土下部より、和鏡が出土。
- 9月15日（月） 雨 残務処理ののち、撤収。

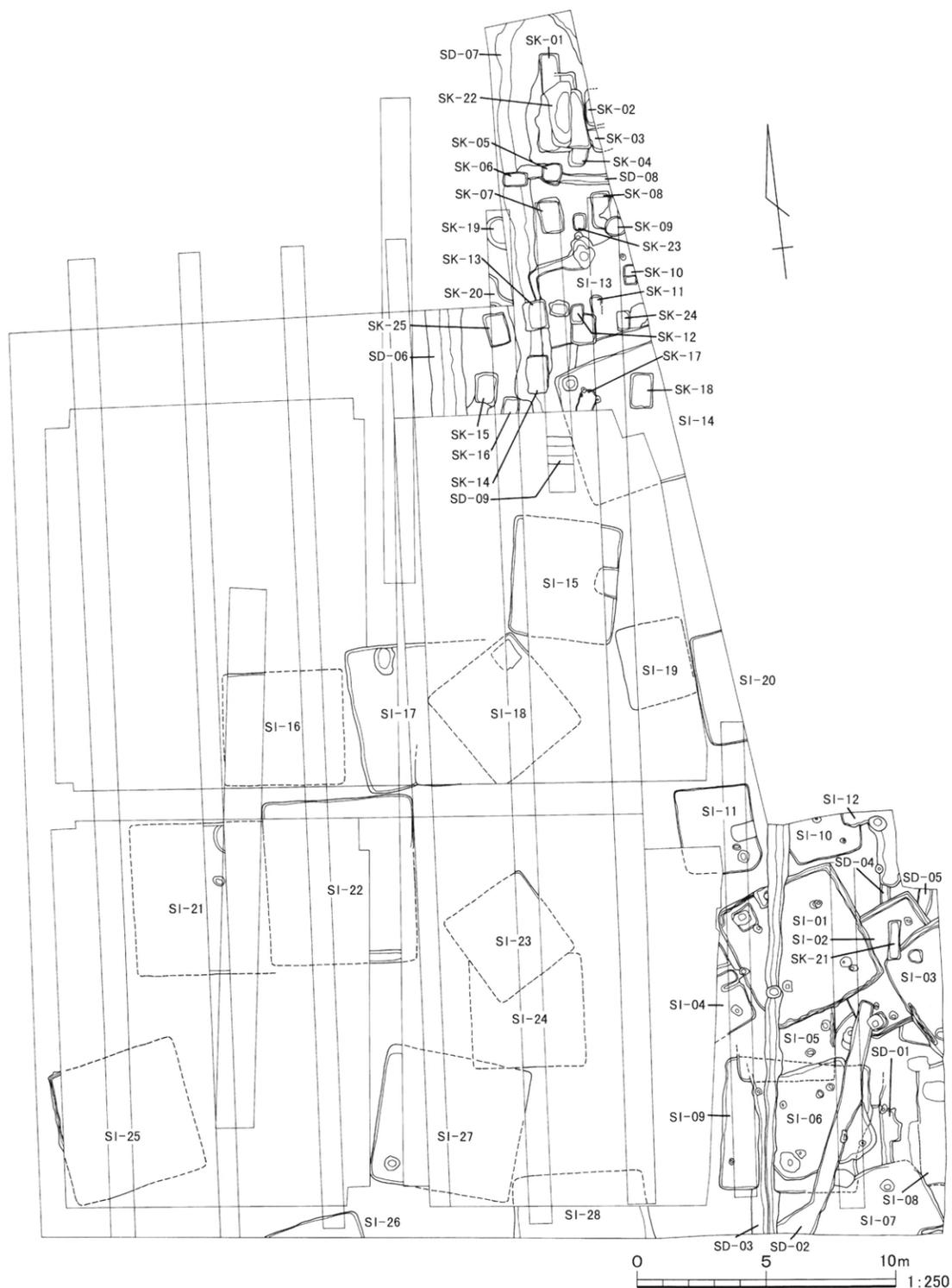


図4 遺跡全体図

IV 調査の成果

1 遺跡の概要

検出された遺構の内訳は、竪穴住居跡 28 軒、土壙（墓穴）20 基、土坑4基、および溝状遺構9条である。調査区南東部において住居跡が密集し、その覆土からは土師器を中心とする遺物が検出されている。一方北部では、おおむね中世とみられる土壙多数、およびその覆土より少量の遺物と人骨が確認された。

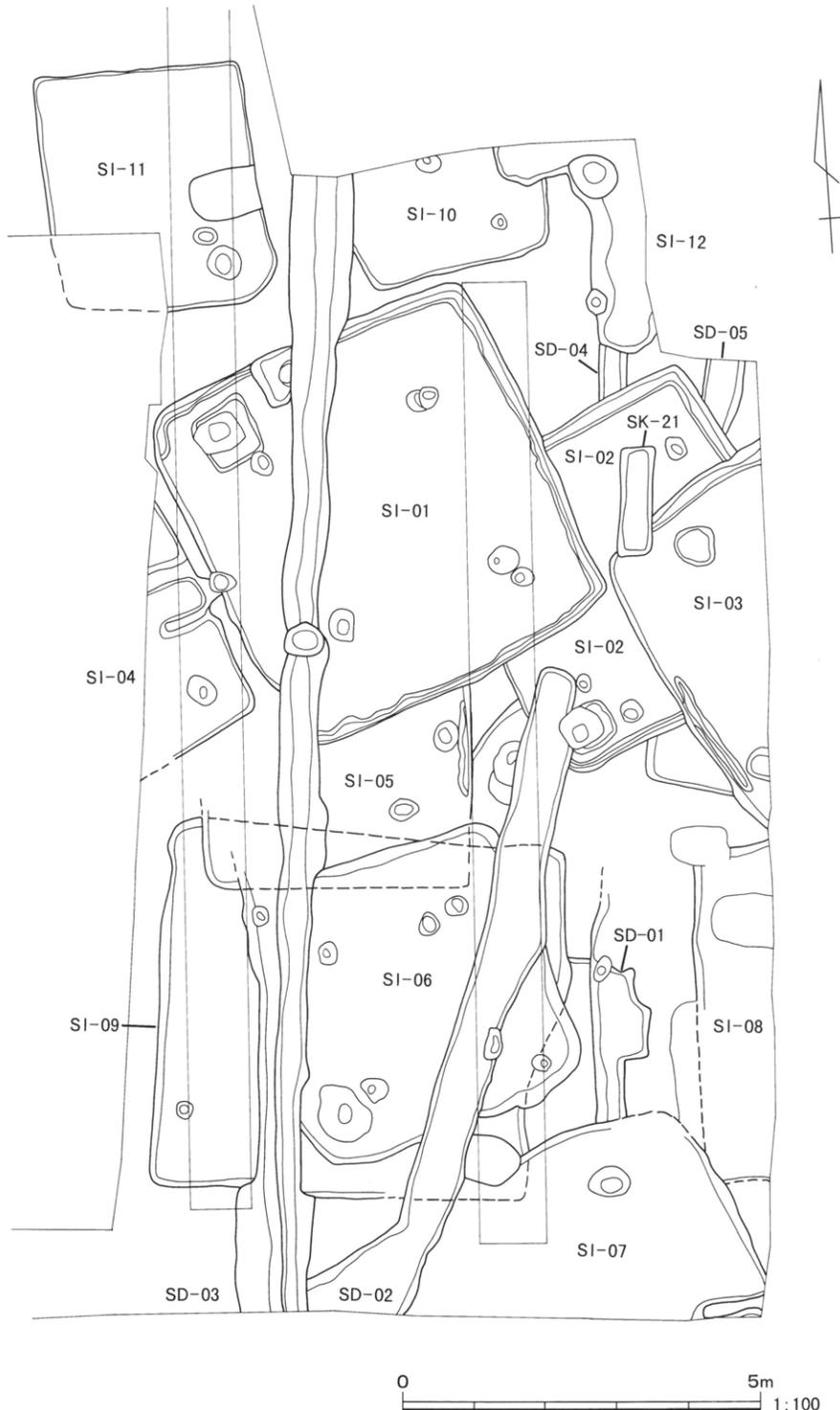


図5 調査区南東部の遺構

2 検出された遺構と遺物

(1) 主要な住居跡

竪穴住居跡は、28軒が検出された。各遺構の帰属時期には、5世紀中葉から8世紀後葉までの時期幅がある。ここでは、そのうち比較的良好な検出状態にあった16軒をとり上げる。

SI-01 (図6・7、表1)

位置： 調査区南東部に位置する。西辺において、より新しいSI-04と重複し、中央付近でSD-03による攪乱を受けている。主軸方位は、N-25°-Wである。

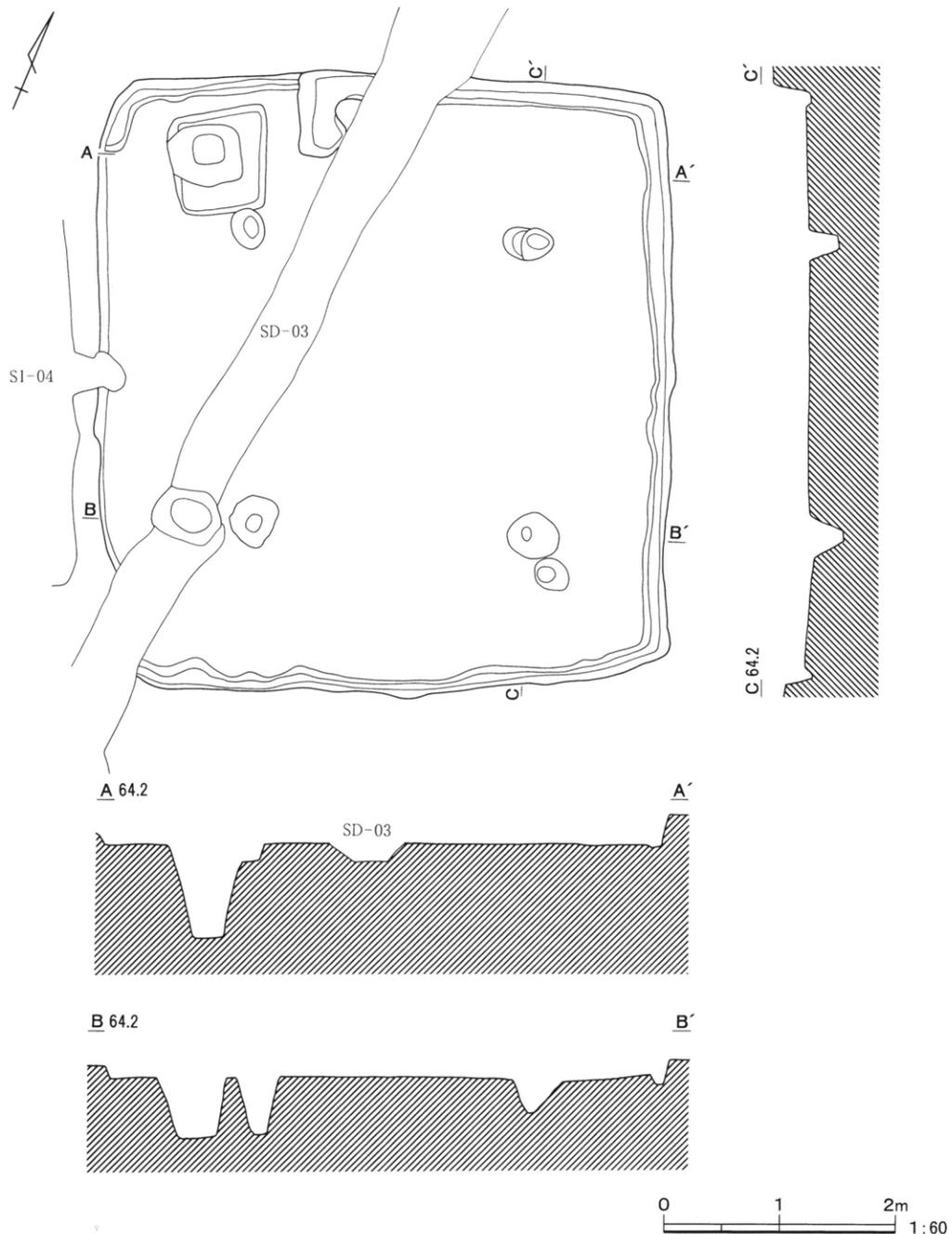


図6 SI-01



図7 SI-01 出土遺物

形状：長軸 5.34m、短軸 5.01m、遺構確認面において隅丸方形を呈する。断面は、浅い凹字形である。

構造：遺構確認面から床面までは最深部で 28cm を測る。壁面は、70～80° の角度で外傾して立ち上がる。

カマドは、住居北辺のほぼ中央に設けられている。SD-03 による攪乱のため全貌は明らかでないが、奥行き 75cm ほどと推測される。壁への切り込みはほとんど見られず、煙道も明確ではない。また、カマドの左側には貯蔵穴がある。開口部において正方形ないし台形、断面は段状の凹字形を呈し、長軸 89cm、短軸 81cm、床面からの深さ 82cm を測る。平面が（隅丸）方形である点、規模が大きめである点は、一般に 5 世紀後葉から 9 世紀後葉までにわたって事例が認められる貯蔵穴の中では、古い部類の特徴に相応する。

ピットは、柱穴に相当する 4 基を含む計 6 基が確認されている。平均にしてピットの長径は 45cm、深さは 37cm 程度を測る。奥左側の 1 基は、貯蔵穴の開口部と近接もしくは重複している。こ

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 甕	口径 — 底径 — 器高 —	体部は算盤玉状を呈する。体部上位に穿孔。	外面—ヘラナデ。内面—ナデ。	白色粒・黒色粒・褐色粒 内—にぶい黄褐色 外—橙色	1 / 4。
2	土師器 甕	口径 (15.5) 底径 — 器高 —	胴部は中位がややふくらむ。口縁部は外反する。	外面—口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ後、上位ナデ。 内面—口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	石英・黒色粒・褐色粒 内—褐灰色 外—にぶい黄褐色	口縁部～胴部 中位 3 / 4 残存。

表1 SI-01 出土遺物観察表

のほか、住居西辺を除く壁際には、最大値にして幅 21cm、深さ 10cm の周溝が認められる。

遺物：覆土より、土師器が出土している。図7- 1は、算盤玉状の体部をもつ甕である。2の甕は、口縁部と胴部中位の直径がほぼ同じであるが、胴部のふくらみから、長胴甕としては古い部類のものであることが分かる。いずれも、5世紀末葉の所産と考えられる。

時期：出土遺物の内容からは断定できないものの、付帯施設の特徴を加味して、5世紀末葉、あるいはその前後に使用された住居と推測される。

SI-02 (図8・9、表2)

位置：調査区南東部に位置する。住居跡2軒をはじめ、以下4つの遺構に切られており、残存範囲は本来の半分弱にとどまる。北西部においてSI-01、南東部でSI-03、さらに北東部でSK-21、南西部ではSD-02と重複している。主軸方位は不明である。

形状：長軸 4.47m、推定短軸 4.26m、遺構確認面において隅丸方形を呈するものと推測される。断面は、浅い凹字形である。

構造：遺構確認面から床面までは最深部で 23cm を測る。壁面は、70～80° の角度で外傾して立ち上がる。

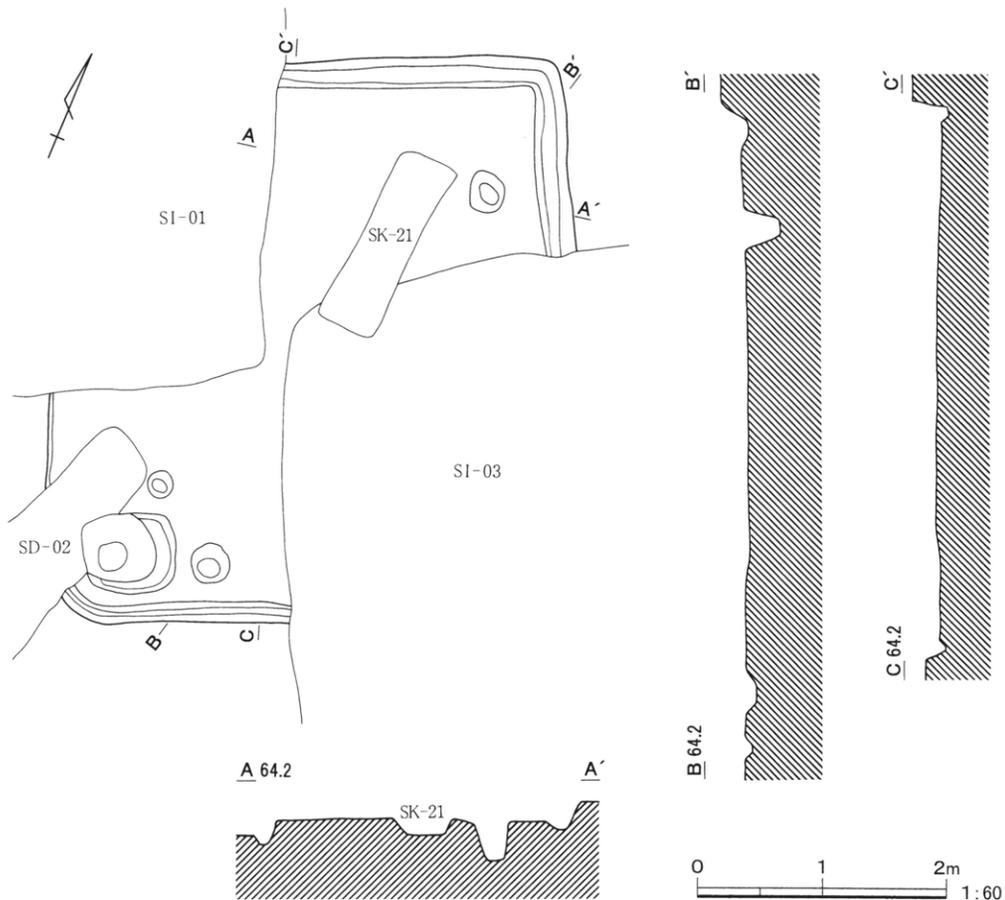
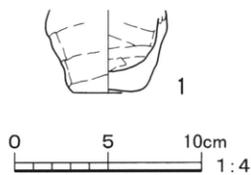


図8 SI-02

カマドの痕跡は確認されなかったが、これは前述の他遺構によって損壊された結果と考えうる。住居跡南西隅に位置する土坑は、開口部において隅丸長方形、断面は段状の凹字形を呈し、長軸74cm、床面からの深さ60cmを測る。規模・形状において貯蔵穴に近似するが、カマドの右隣りに設けられる例が多い同種の付帯施設としては、やや変則的な位置である。一方ピットは、柱穴に相当する可能性のあるものを含め

3基が確認されている。平均にしてピットの長径は30cm、深さは22cm程度を測る。このほか壁際には、最大値にして幅18cm、深さ6cmの周溝が認められる。



遺物：覆土より、土師器が出土している。図9-1は、いわゆるミニチュア土器である。

図9 SI-02 出土遺物

時期：遺構の残存状態、および出土遺物の内容からは有力な手がかりが得られず、不明としておく。

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 ミニチュア 土器	口径 — 底径 3.5 器高 —	平底。体部は上位に向かってふくらみをもつ。	外面—体部～底部ヘラケズリ。 内面—ヘラナデ。	石英・黒色粒 内—赤褐色 外—明赤褐色	体部下位～底部残存。

表2 SI-02 出土遺物観察表

SI-03 (図10)

位置：調査区南東部に位置する。東部が調査区外となっており、また西隅においてSK-21による攪乱を

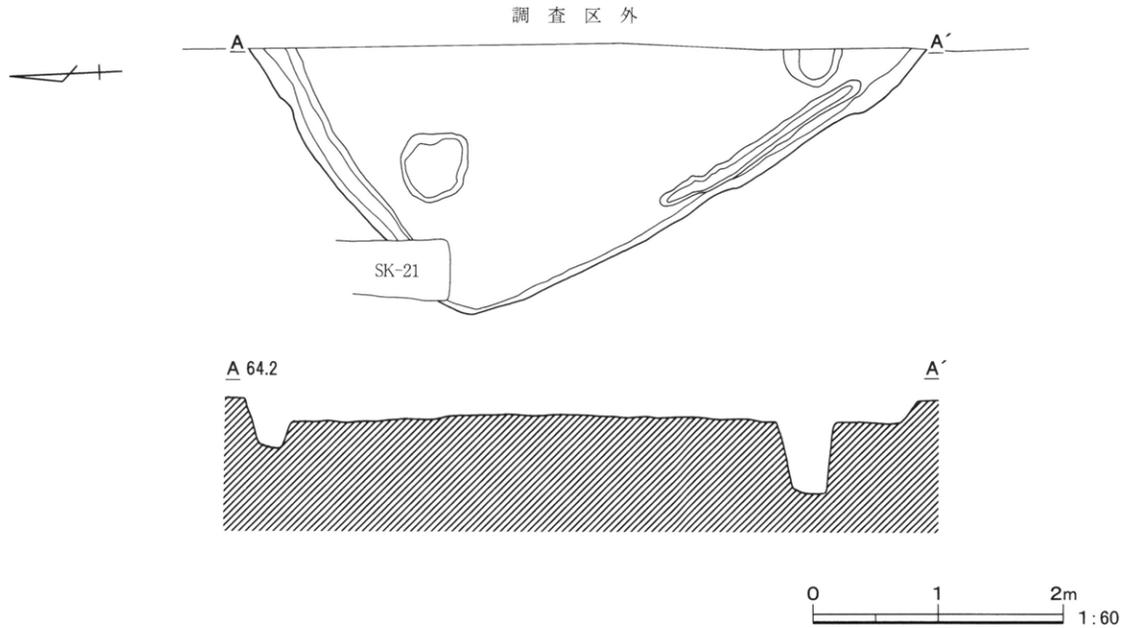


図10 SI-03

受けている。主軸方位は不明である。

形状： 長軸、短軸とも規模は不明。最大残存長 5.43m を測り、遺構確認面において隅丸方形を呈するものと推測される。断面は、浅い凹字形である。

構造： 遺構確認面から床面までは最深部で 19cm を測る。壁面は、 $60 \sim 70^\circ$ の角度で外傾して立ち上がる。

調査範囲において、カマドの痕跡は確認されなかった。柱穴に相当する可能性のあるピットは、2基検出されている。平均にしてピットの長径は 50 ~ 60cm、深さは 22cm 程度と推測される。このほか壁際には、最大値にして幅 18cm、深さ 22cm の周溝が部分的に認められる。

遺物： 本住居跡に伴うことが確実で、かつ図化が可能な状態の遺物は出土しなかった。

時期： 遺構の残存状態、および出土遺物の内容からは有力な手がかりが得られず、不明としておく。

SI-04 (図11)

位置： 調査区南東部に位置する。西部が調査区外となっており、検出範囲は本来の半分弱にとどまる。推定主軸方位は、 $N-68^\circ-E$ である。

形状： 長軸、短軸とも規模は不明。最大残存長 3.58m を測り、遺構確認面において隅丸方形または隅丸長方形を呈するものと推測される。断面は、浅い凹字形である。

構造： 後世における削平などの影響を受けたためか、遺構確認面から床面までは最深部でも 19cm と浅い。壁面は、 $60 \sim 70^\circ$ の角度で外傾して立ち上がる。

カマドは、住居北東辺において検出された。幅 1.02m、焚出口から壁面までの奥行きは 78cm を測る。また、今回調査された竪穴住居跡の中で唯一、煙出口が良好な状態で確認されている。長径 35cm、壁面から煙出口までの間隔は 12cm である。このほか、長径 45cm、短径 37cm、深さ 48cm のピットが、カマドの右側にて検出されている。なお、調査範囲において周溝は認められなかった。

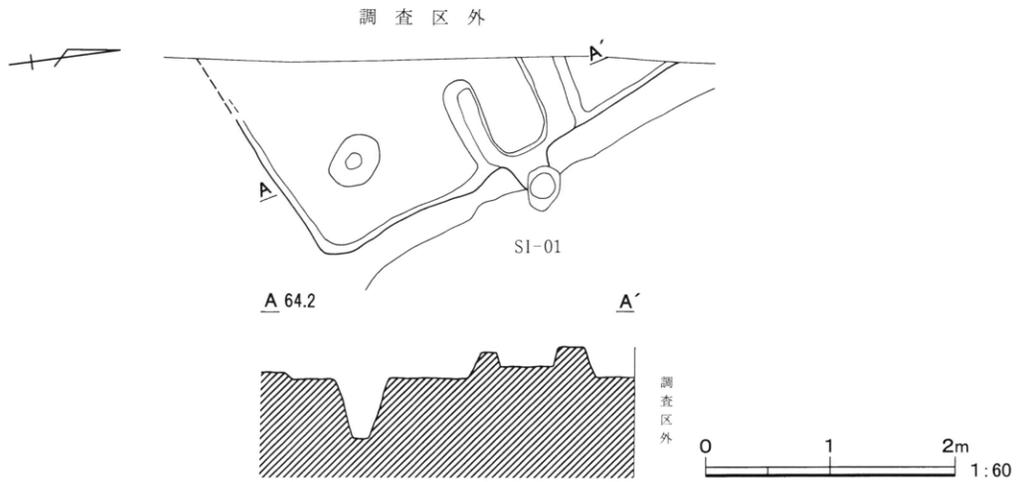


図11 SI-04

遺物： 本住居跡に伴うことが確実で、かつ図化が可能な状態の遺物は出土しなかった。

時期： 出土遺物の内容からは有力な手がかりが得られず、不明としておく。

SI-05 (図12)

位置： 調査区南東部に位置する。SI-01、SI-06、およびSD-03に切られており、残存範囲は本来の4分の1程度にとどまる。主軸方位は不明である。

形状： 長軸、短軸とも規模は不明。断面形も判然としない。最大残存長3.81mを測り、遺構確認面において隅丸方形を呈するものと推測される。

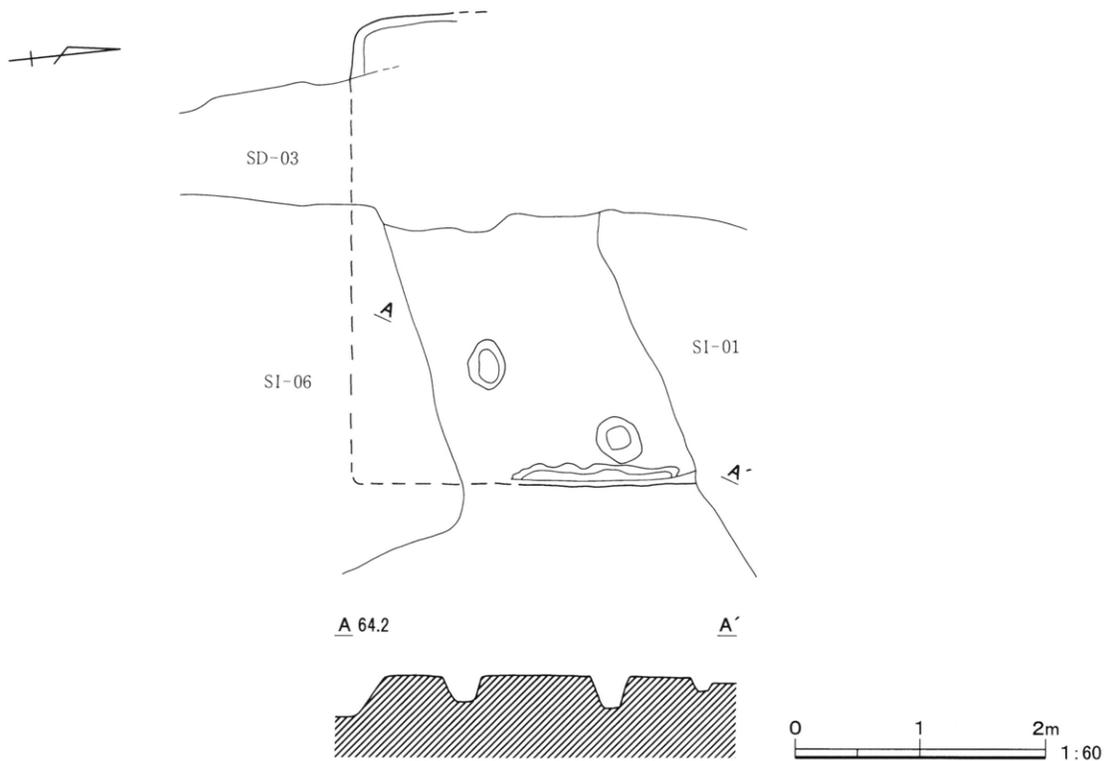


図12 SI-05

構造： 後世における削平などの影響を受けたためか、遺構確認面と床面とのレベル差はほとんどない。柱穴に相当する可能性のあるピットは2基検出されており、平均にして長径 41cm、深さ 23cm を測る。また、住居東辺に、幅 10cm あまり、深さ 11cm 前後の周溝がわずかに残っていた。なお、残存範囲においてカマドや貯蔵穴は確認されなかった。

遺物： 本住居跡に伴うことが確実に、かつ図化が可能な状態の遺物は出土しなかった。

時期： 遺構の残存状態、および出土遺物の内容からは有力な手がかりが得られず、不明としておく。

SI-06 (図13)

位置： 調査区南東部に位置する。SD-02 および SD-03 に切られている。主軸方位は不明である。

形状： 長軸・短軸とも不明。残存範囲において長軸 4.17m を測る。遺構確認面において隅丸方形を呈するものと推測され、断面は浅い凹字形となる。

構造： 遺構確認面から床面までの最大深は、30cm を測る。壁面は、70~80° の角度で外傾して立ち上がる。

ピットは、柱穴に相当する可能性の高い4基をはじめ計6基が検出されており、平均にして長径 34cm、深さ 20cm を測る。住居南西隅にて見つかった長径 90cm、短径 66cm、深さ 44cm の土坑は、貯蔵穴の可能性はある。なお、残存範囲においてカマドおよび周溝は確認されなかった。カマドについては、SD-02 と SD-03 によって切られた範囲のいずれかに本来存在していたものと考えられる。

遺物： 本住居跡に伴うことが確実に、かつ図化が可能な状態の遺物は出土しなかった。

時期： 遺構の残存状態、および出土遺物の内容からは有力な手がかりが得られず、不明としておく。

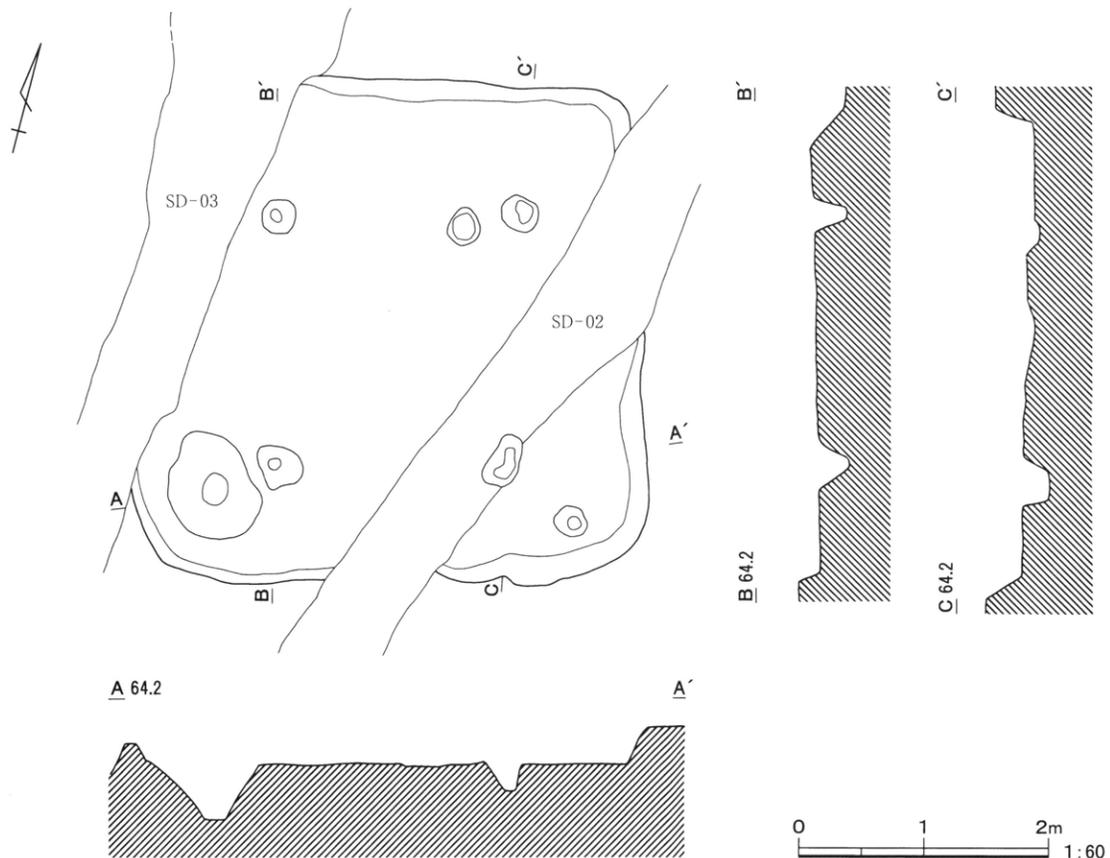


図13 SI-06

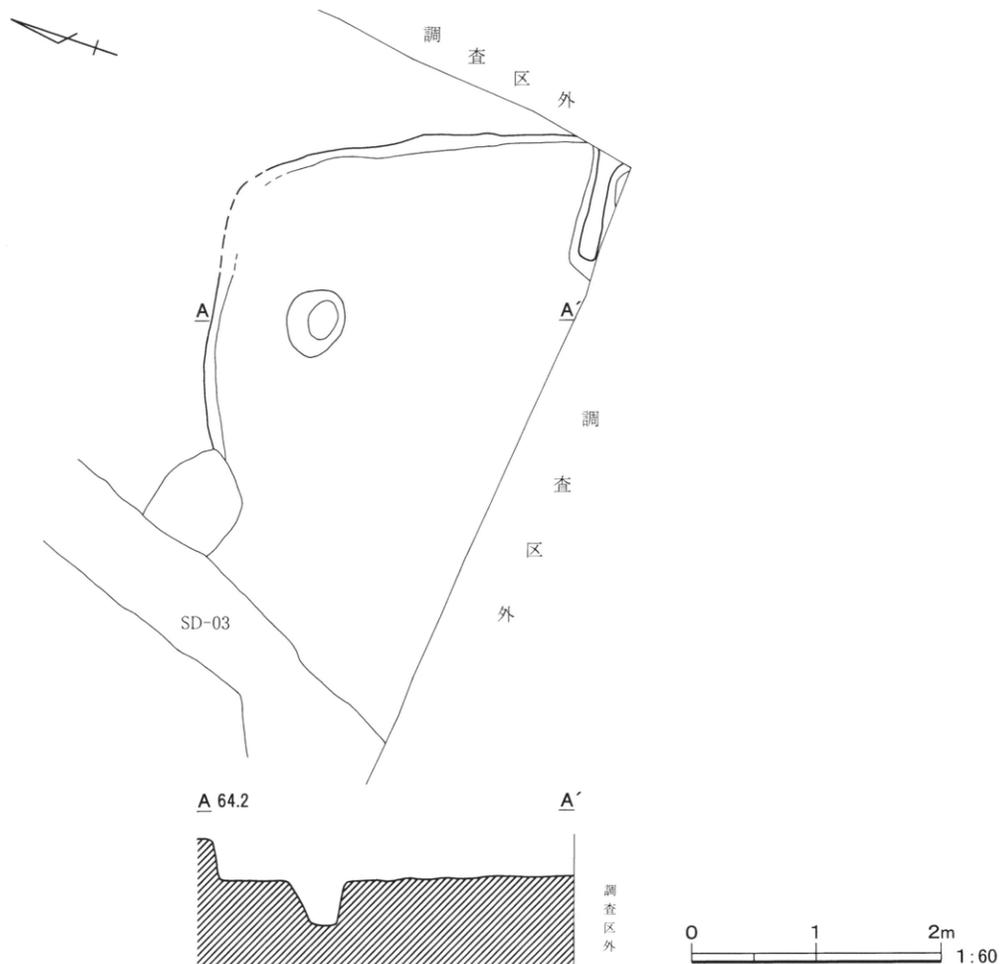


図14 SI-07

SI-07 (図14・15、表3)

位置： 調査区南東端に位置する。遺構東部および南部が調査区外となるほか、西部をSD-03に切られるため、調査されたのは全体の半分にも満たない。主軸方位は不明である。

形状： 長軸・短軸とも規模は不明。最大残存長は5.01mを測る。遺構確認面において隅丸方形を呈するものと推測され、断面は浅い凹字形となる。

構造： 遺構確認面から床面までの最大深は、33cmを測る。壁面は、80°前後の角度で外傾して立ち上がる。

カマドは、調査区の最南東端にて左半分のみが検出された。詳細は明らかにできないが、焚出口から壁面までの奥行は1.20m程度と推測される。また、柱穴に相当する長径54cm、短径46cm、深さ35cmのピットが、カマドの左側で確認された。なお、残存範囲において貯蔵穴および周溝は確認されなかった。

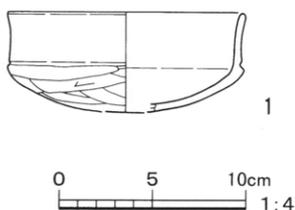


図15 SI-07 出土遺物

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 坏	口径 (12.7) 底径 — 器高 (5.4)	丸底。口縁部は体部との境に稜をもち、外反ぎみに直立する。	外面—口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ。	石英・白色粒・ 黒色粒 内外—明赤褐色	1/2。

表3 SI-07 出土遺物観察表

遺物： 覆土より、土師器が出土している。図 15-1 は、土師器の坏である。口縁はおおむね直立するが、わずかに外傾している。6 世紀前葉～中葉の所産とみられる。

時期： 遺構の残存状態、および出土遺物の内容からは有力な手がかりが得られず、不明としておく。

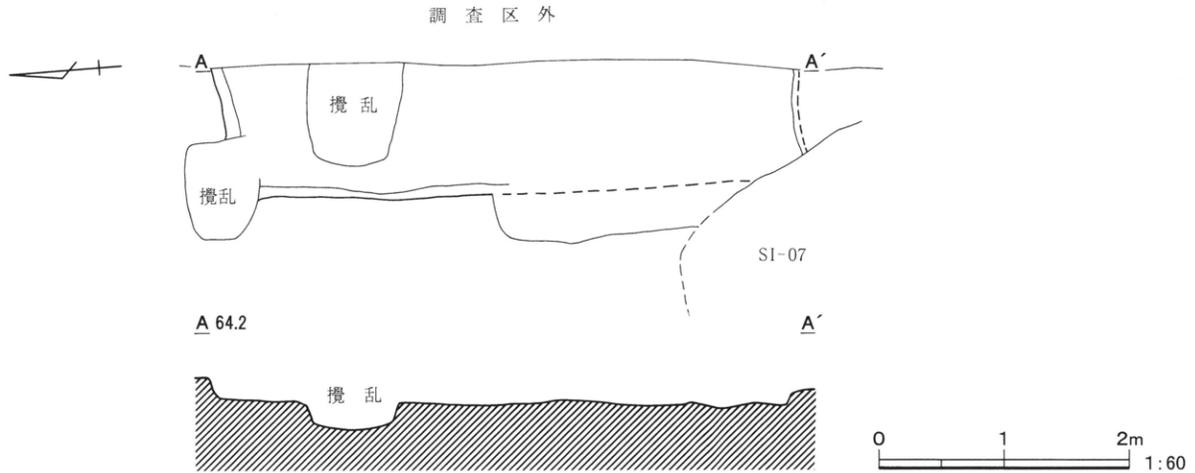


図16 SI-08

SI-08 (図16)

位置： 調査区南東部に位置する。遺構東部が調査区外となるほか、SI-07 などによる攪乱を受けており、調査されたのは全体の4分の1にも満たない。主軸方位は不明である。

形状： 長軸・短軸とも規模は不明。最大残存長は4.74mを測る。遺構確認面において隅丸方形ないし隅丸長方形を呈するものと推測され、断面は浅い凹字形となる。

構造： 遺構確認面から床面までは、最深でも15cmとごく浅い。壁面は、80°前後の角度で外傾しながら立ち上がる。調査範囲において、カマド、貯蔵穴、柱穴、および周溝といった、付帯施設の痕跡は確認されなかった。

遺物： 覆土より、土師器の破片が出土している。

時期： 遺構の残存状態、および出土遺物の内容からは有力な手がかりが得られず、不明としておく。

SI-09 (図17)

位置： 調査区南東部に位置する。SI-06、SD-02、およびSD-03による攪乱を受けており、調査されたのは全体の3分1程度にとどまる。推定主軸方位は不明である。

形状： 長軸は5.82mを測る。遺構確認面においておおむね隅丸方形を呈するものと推測され、断面は浅い凹字形となる。

構造： 遺構確認面から床面までは、最深部で23cmを測る。壁面は、70～80°の角度で外傾して立ち上がる。住居南西隅において、長径24cm、短径21cm、深さ15cmのピットが検出されたが、これが柱穴に相当するものかどうかは判然としない。なお、調査範囲においてカマド、貯蔵穴、および周溝といった付帯施設の痕跡は確認されなかった。このうちカマドと貯蔵穴については、上記の攪乱範囲のいずれかに本来存在していたものと考えられる。

遺物： 本住居跡に伴うことが確実で、かつ図化が可能な状態の遺物は出土しなかった。

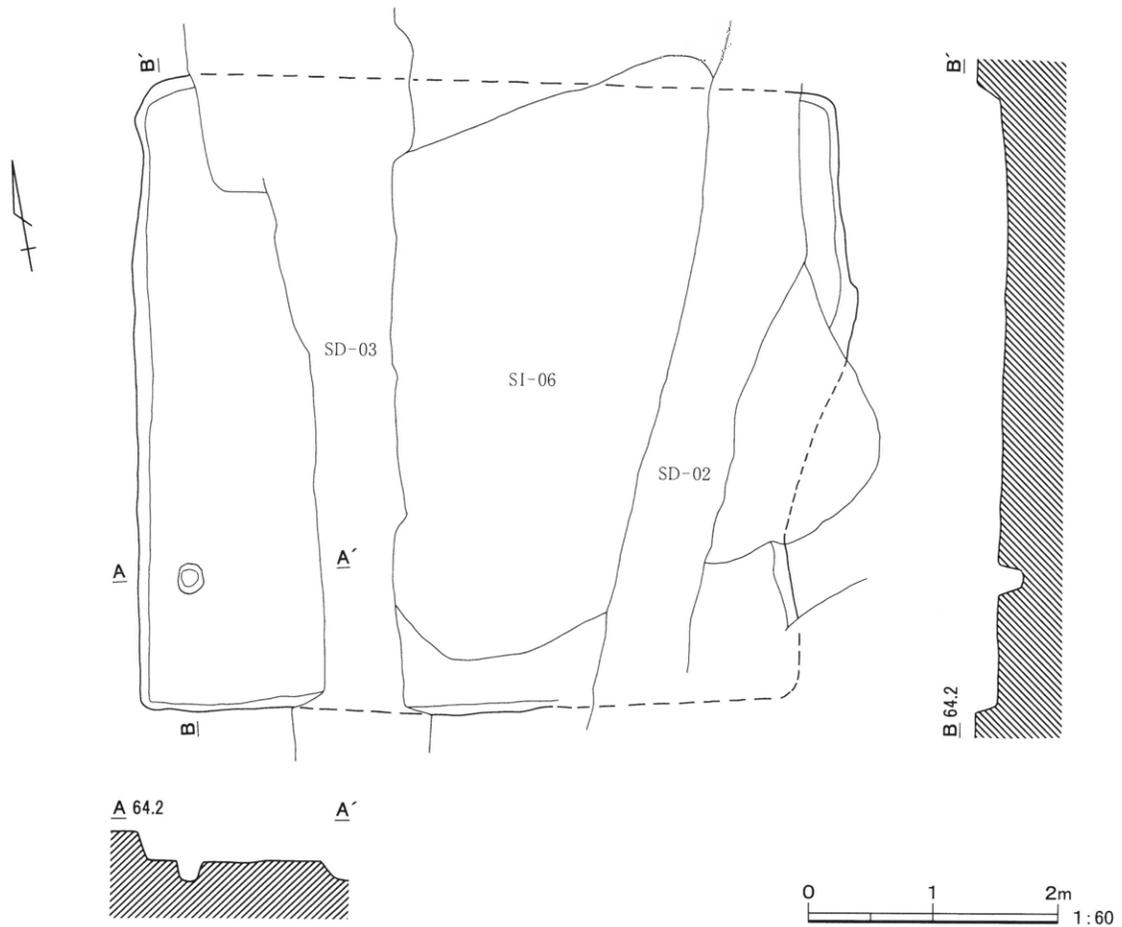


図17 SI-09

時期： 遺構の残存状態、および出土遺物の内容からは有力な手がかりが得られず、不明としておく。

SI-10 (図18)

位置： 調査区南東部に位置する。遺構北部が調査区外となるほか、SI-12 および SD-03 に切られるため、調査されたのは全体の半分程度にとどまる。主軸方位は不明である。

形状： 長軸・短軸とも規模不明、調査範囲における長径は2.85mを測る。遺構確認面において隅丸方形ないし隅丸長方形を呈するものと推測され、断面は浅い凹字形となる。

構造： 遺構確認面から床面までは、最深でも6cmとごく浅い。壁面は、60°前後の角度で外傾して立ち

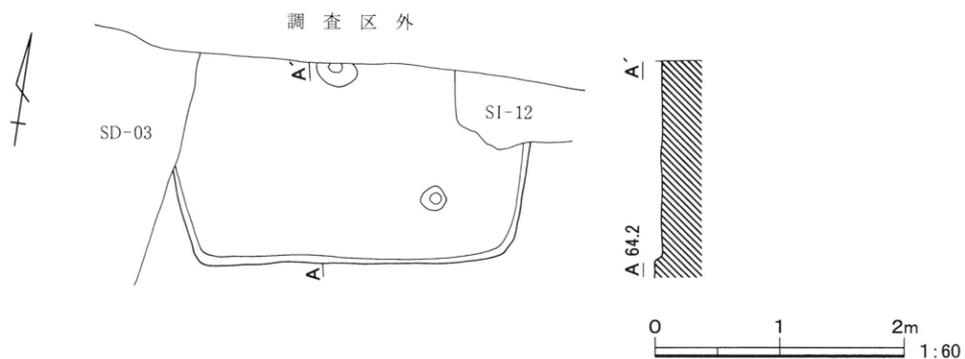


図18 SI-10

上がる。住居ほぼ中央、および南東部においてピットが2基検出された。前者は長径 33cm、深さ 15cm、後者は長径 21cm、短径 20cm をそれぞれ測る。ただし、これらが柱穴に相当するかどうかは不明である。なお、残存範囲においてカマド、貯蔵穴、および周溝は確認されなかった。

遺物： 本住居跡に伴うことが確実で、かつ図化が可能な状態の遺物は出土しなかった。

時期： 遺構の残存状態、および出土遺物の内容からは有力な手がかりが得られず、不明としておく。

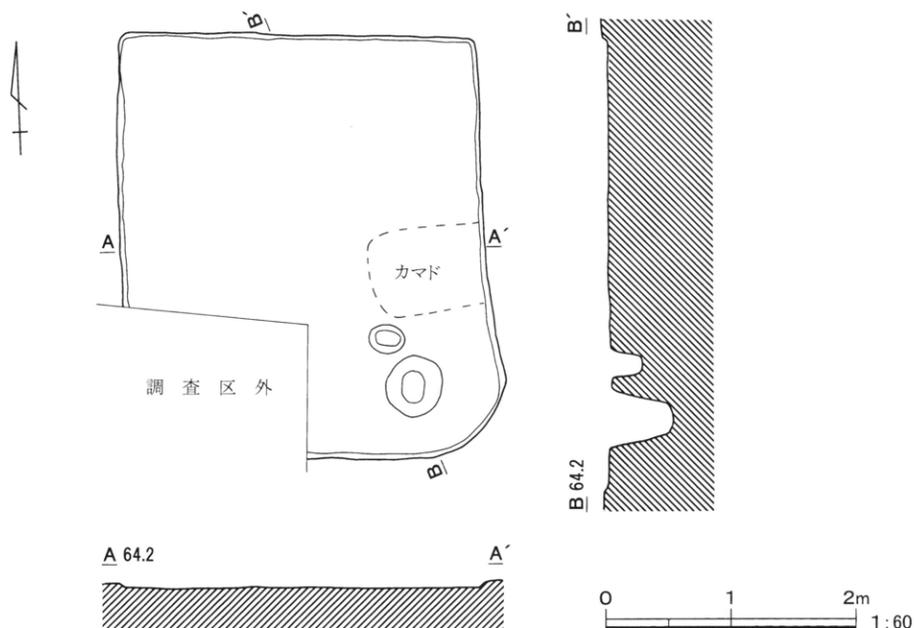


図19 SI-11

SI-11 (図19・20、表4)

位置： 調査区南東部に位置する。遺構南西部が調査区外となっている。主軸方位は、S-87°-Eである。

形状： 長軸 3.40m、短軸 2.94m を測る。短軸が主軸となり、また今回調査された竪穴住居跡の中でも小さな部類に属する。遺構確認面において隅丸長方形を呈し、断面形は不明である。

構造： 後世における削平などの影響により、遺構確認面から床面までは最深でも 5cm とごく浅い。このため、壁面の立ち上がりの角度は判然としない。

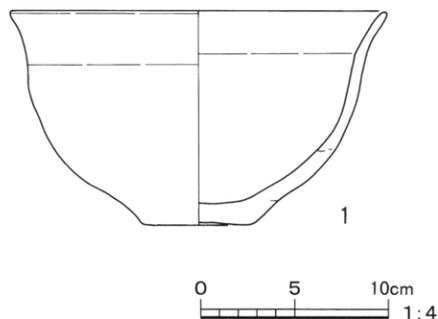


図20 SI-11 出土遺物

カマドは、住居東辺の中央やや右寄りに設けられている。ただし、検出時の残存状況はきわめて悪く、規模などの詳細は不明である。また、長径 28cm、短径 24cm、深さ 23cm の柱穴に加え、長径 49cm、短径 45cm、深さ 51cm の貯蔵穴が、カマドの右側で確認された。なお、残存範囲において周溝は確認さ

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器鉢	口径 (20.0) 底径 6.0 器高 11.3	平底。体部はふくらみをもって立ち上がり、口縁部はやや外反する。	外面一口縁部ヨコナデ、体部器面荒れているため不明瞭。底部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ。	雲母・黒色粒・粗砂粒 内外一明赤褐色	2/3。

表4 SI-11 出土遺物観察表

れなかった。

遺物： 覆土より、土師器が出土している。図 20-1 は、土師器の鉢である。

時期： 遺構の残存状態、および出土遺物の内容からは有力な手がかりが得られず、ここでは不明としておく。

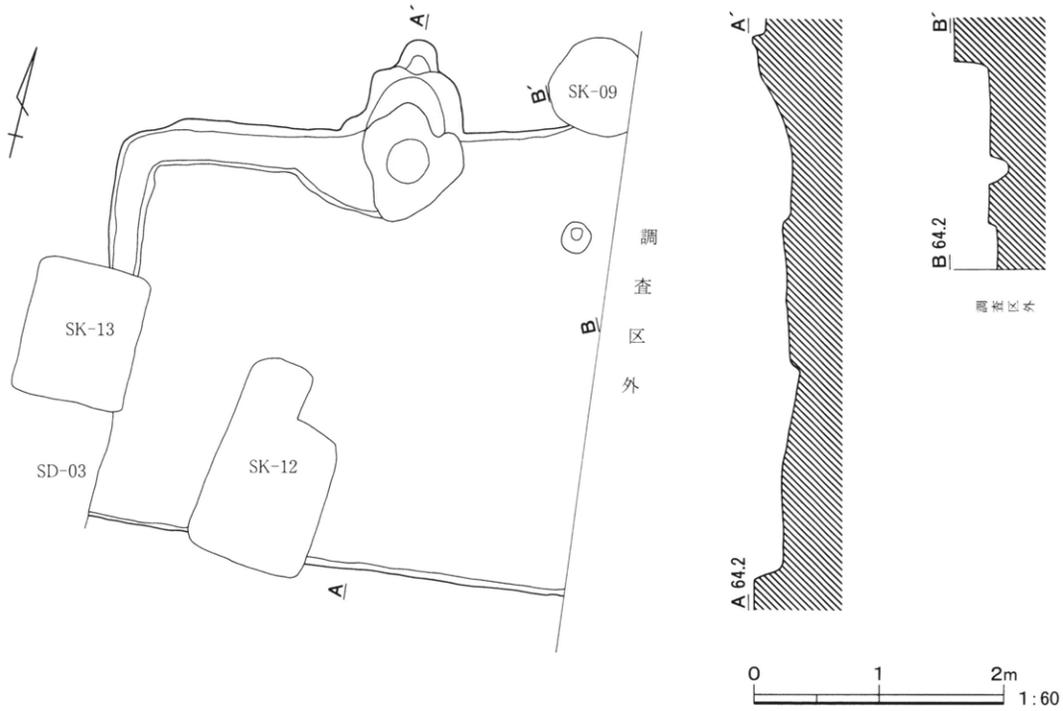


図21 SI-13

SI-13 (図21・22、表5)

位置： 調査区北部に位置する。遺構東部が調査区外となり、SK-09、SK-12・SK-13 による攪乱を受けている。主軸方位は、N-10°-Wである。

形状： 短軸 3.58m を測り、長軸の規模は不明である。短軸が主軸となり、また今回調査された竪穴住居跡の中でも比較的小さな部類に属する。遺構確認面において隅丸長方形、断面はおおむね浅い凹字形を呈する。

構造： 遺構確認面から床面までは、最深部で 28cm を測る。壁面は、80° 前後の角度で外傾して立ち上がる。

カマドは、住居北辺のほぼ中央に設けられている。ただし、検出時の残存状況は悪かった。幅約 80cm、焚出口から壁面までの奥行は約 70cm と推測される。また、壁面への切り込みが顕著で、壁面から煙出口の痕跡までの距離は約 70cm である。このほか、柱穴の可能性のある長径 25cm、短径 24cm、深さ 16cm のピットが、カマドの右側で確認された。なお、残存範囲において貯蔵穴および周溝は確認されなかったが、北東部の壁際付近が幅 30cm 前後の範囲で帯状にくぼんでいた。

遺物： 覆土より、土師器が出土している。図 22-1～3 は、土師器の甕である。口縁部から頸部にかけてくの字状に外反し、胴部上半が張る器形、およびケズリにみられる特徴から、8世紀後葉の所産と考えられる。

時期： 遺構の付帯施設が示す特徴、および出土遺物の内容から、8世紀後葉に構築ないし廃絶された可能性を指摘できる。

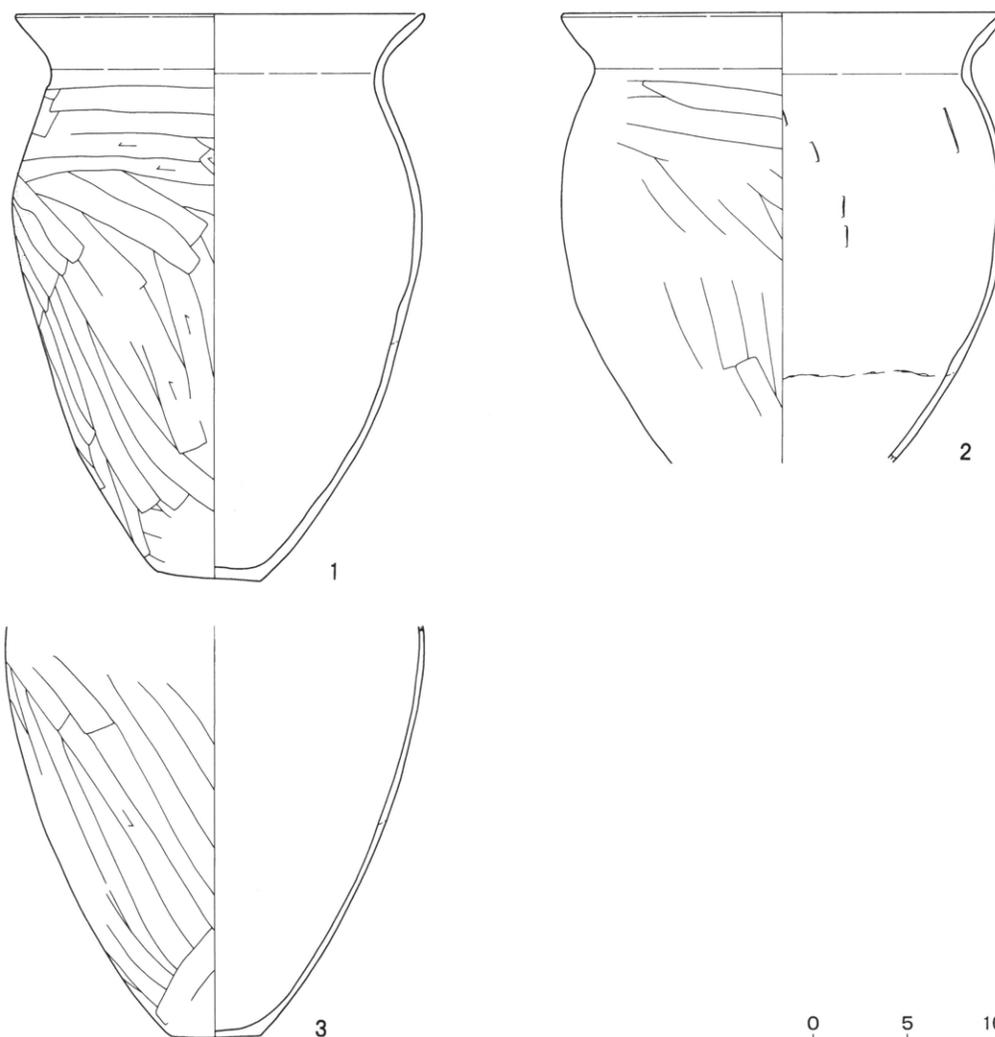


図22 SI-13 出土遺物

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器	口径 (22.0) 底径 5.5 器高 30.2	わずかに丸みを帯びた平底。胴部は上位がややふくらむ。口縁部は外反して開く。	外面-口縁部ヨコナデ、胴部～底部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ、胴部～底部ナデ。	チャート・黒色 粒・粗砂粒 内外-橙色	一部欠損。
2	土師器	口径 (23.7) 底径 - 器高 -	胴部は上位がややふくらむ。口縁部は外反して開く。	外面-口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	チャート・黒色 粒・粗砂粒 内外-明赤褐色	口縁部～胴部 1/3 残存。
3	土師器	口径 - 底径 4.9 器高 -	わずかに丸みを帯びた平底。胴部は上位に向かってややふくらむ。	外面-胴部～底部ヘラケズリ。内面-胴部～底部ナデ。	チャート・粗砂粒 内-橙色 外-にぶい褐色	胴部中位～底部 1/2 残存。

表5 SI-13 出土遺物観察表

SI-14 (図23・24、表6)

位置： 調査区北部に位置する。遺構の東部および南西部が調査区外となっており、調査されたのは住居跡全体の半分程度にとどまる。主軸方位は不明である。

形状： 調査範囲において南北 5.34m を測る。東西の規模は不明である。構確認面において隅丸方形、断面は浅い凹字形を呈するものと推測される。

構造： 遺構確認面から床面までは、最深部で 16cm を測る。壁面は、70～80° の角度で外傾して立ち上がる。

付帯施設としては、貯蔵穴の可能性のある長径 57cm、短径 54cm、深さ 25cm の土坑が、住居の北西

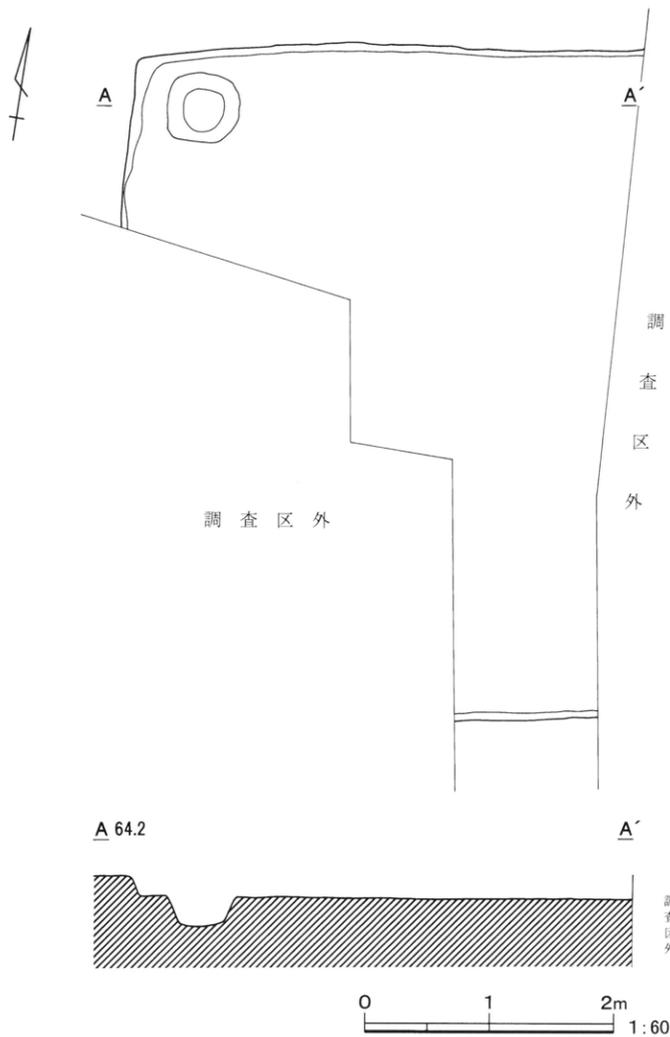


図23 SI-14

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 甕	口径 (21.5) 底部 — 器高 —	胴部はふくらみがなく、口縁部は外反ぎみに開く。	外面—口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ、胴部ナデ。	石英・チャート・粗砂粒 内外—橙色	口縁部～胴部上位1/4残存。

表6 SI-14 出土遺物観察表

SI-25 (図25・26、表7)

位置： 調査区南西部に位置する。トレンチ調査のみ行われた範囲のため、調査の対象とされたのは住居北西隅のごく一部にとどまる。主軸方位は不明である。

形状： 長軸・短軸の規模は不明。調査範囲における最大残存長は3.18mを測る。遺構確認面において

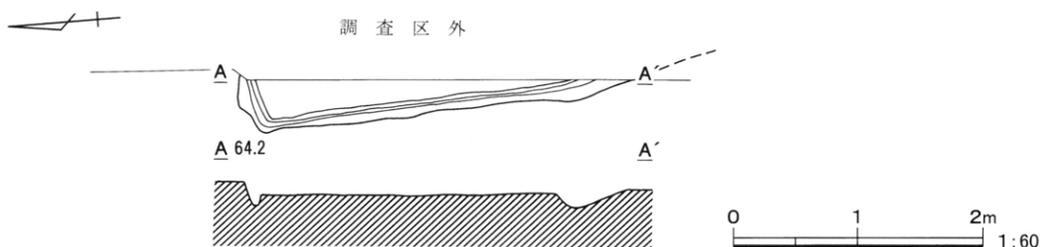


図25 SI-25

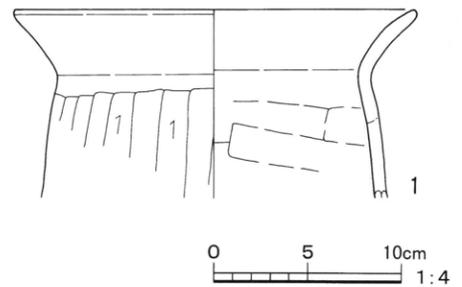


図24 SI-14 出土遺物

隅にて検出されている。カマド、柱穴、および周溝の痕跡は、調査範囲において確認されていない。

遺物： 覆土より、土師器が出土している。図24-1は、土師器の甕である。口縁部から頸部にかけてくの字状に外反するほか、胴部上半に顕著な張りが認められない。7世紀後葉～8世紀初頭の所産と考えられる。

時期： 遺構の残存状態、および出土遺物の内容からは有力な手がかりが得られず、不明としておく。

隅丸方形、断面は総じて浅い凹字形を呈するものと推測される。

構造： 遺構確認面から床面までは、最深部でも8cmと浅い。壁面は、70～80°の角度で外傾して立ち上がる。付帯施設としては、最大値にして幅10cm、深さ6cmの周溝が検出されるにとどまり、カマド、貯蔵穴、および柱穴の痕跡は認められなかった。

遺物： 覆土より、土師器が出土している。図26-1は、土師器の碗である。

時期： 有力な手がかりが得られず、不明としておく。

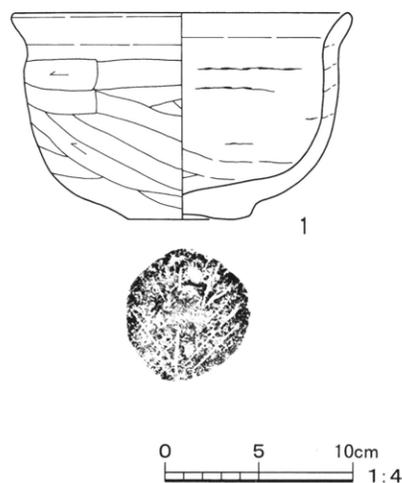


図26 SI-25 出土遺物

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 碗	口径 18.1 底径 6.4 器高 10.9	上げ底。体部はややふくらみをもって立ち上がる。口縁部は短く外反して立ち上がり、端部は肥厚する。	外面—口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ、底部木葉痕。内面—口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ。	石英・角閃石 内—橙色 外—明赤褐色	完形。

表7 SI-25 出土遺物観察表

SI-26 (図27)

位置： 調査区南西部に位置する。南側が調査区外となるため、調査の対象とされたのは住居北辺付近のごく一部にとどまる。主軸方位は不明である。

形状： 長軸・短軸の規模は不明。調査範囲における最大残存長は3.87mを測る。遺構確認面において

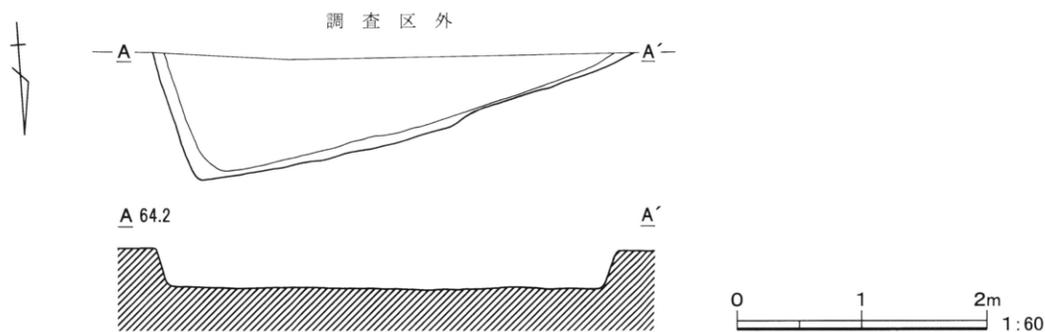


図27 SI-26

隅丸方形もしくは隅丸長方形、断面は浅い凹字形を呈するものと推測される。

構造： 遺構確認面から床面まで、最深部にして31cmを測る。壁面は、70°前後の角度で外傾して立ち上がる。カマド、貯蔵穴、柱穴、および周溝の痕跡は確認されなかった。

遺物： 本住居跡に伴うことが確実で、かつ図化が可能な状態の遺物は出土しなかった。

時期： 有力な手がかりが得られず、不明としておく。

SI-28 (図28・29、表8)

位置： 調査区南部に位置する。調査の対象とされたのは住居中央付近のごく一部にとどまる。主軸方位は不明である。

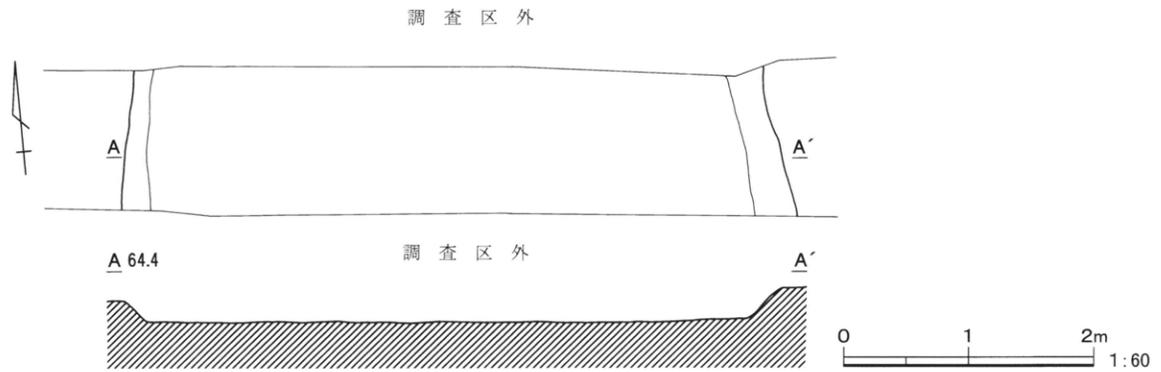


図28 SI-28

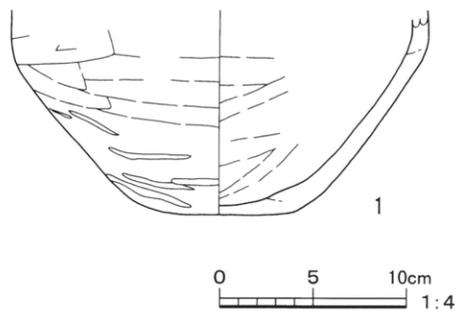


図29 SI-28 出土遺物

形状： 長軸・短軸の規模は不明。調査範囲における最大残存長は5.43mを測る。遺構確認面において隅丸方形もしくは隅丸長方形、断面は浅い凹字形を呈するものと推測される。

構造： 遺構確認面から床面まで、最深部にして25cmを測る。壁面は、45°前後の角度で外傾して立ち上がる。カマド、貯蔵穴、柱穴、および周溝といった付帯施設の痕跡は確認されなかった。

遺物： 覆土より、土師器が出土している。図29-1は、土師器の壺、もしくは甕の下半部である。

時期： 有力な手がかりが得られず、不明としておく。

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器壺	口径— 底径8.7 器高—	丸みを帯びた平底。胴部はふくらみをもって立ち上がる。胴部下位に最大径をもつ。	外面—胴部下位ヘラケズリ後、ミガキ、底部ヘラケズリ。内面—胴部下位～底部ナデ。	雲母・チャート・褐色粒 内—黒褐色 外—にぶい赤褐色	胴部下位～底部3/4残存。

表8 SI-28 出土遺物観察表

(2) その他の住居跡

前項にてとり上げた16軒のほか、今回の調査では12軒の竪穴住居跡が調査されている。これらは、主

遺構名	位置	平面形(推定)	規模(m)		付帯施設・備考
			最大残存長	深さ	
SI-12	調査区南東部	隅丸方形	—	—	SI-10を切る
SI-15	調査区中央部	隅丸方形	4.61	—	主軸方位S-77°-E、短軸(主軸)5.02m、東辺中央に幅1.18mのカマド
SI-16	調査区中央部	隅丸方形	—	—	6世紀前葉前後の住居跡か
SI-17	調査区中央部	隅丸方形	5.67	—	北隅付近に土坑1基、5世紀中葉の住居跡か
SI-18	調査区中央部	隅丸方形	0.99	—	北隅に貯蔵穴の可能性のある土坑1基
SI-19	調査区中央部	隅丸方形	3.21	—	—
SI-20	調査区中央部	隅丸方形	4.42	—	—
SI-21	調査区南西部	隅丸方形	5.89	—	北部に土坑とピット各1基
SI-22	調査区南西部	隅丸方形	6.54	0.31	南部に周溝、5世紀後葉～6世紀前葉の住居跡か
SI-23	調査区南部	隅丸方形	1.42	—	—
SI-24	調査区南部	隅丸方形	0.91	—	—
SI-27	調査区南部	隅丸方形	5.39	0.30	南西部に土坑もしくはピット1基

表9 その他の住居跡一覧表

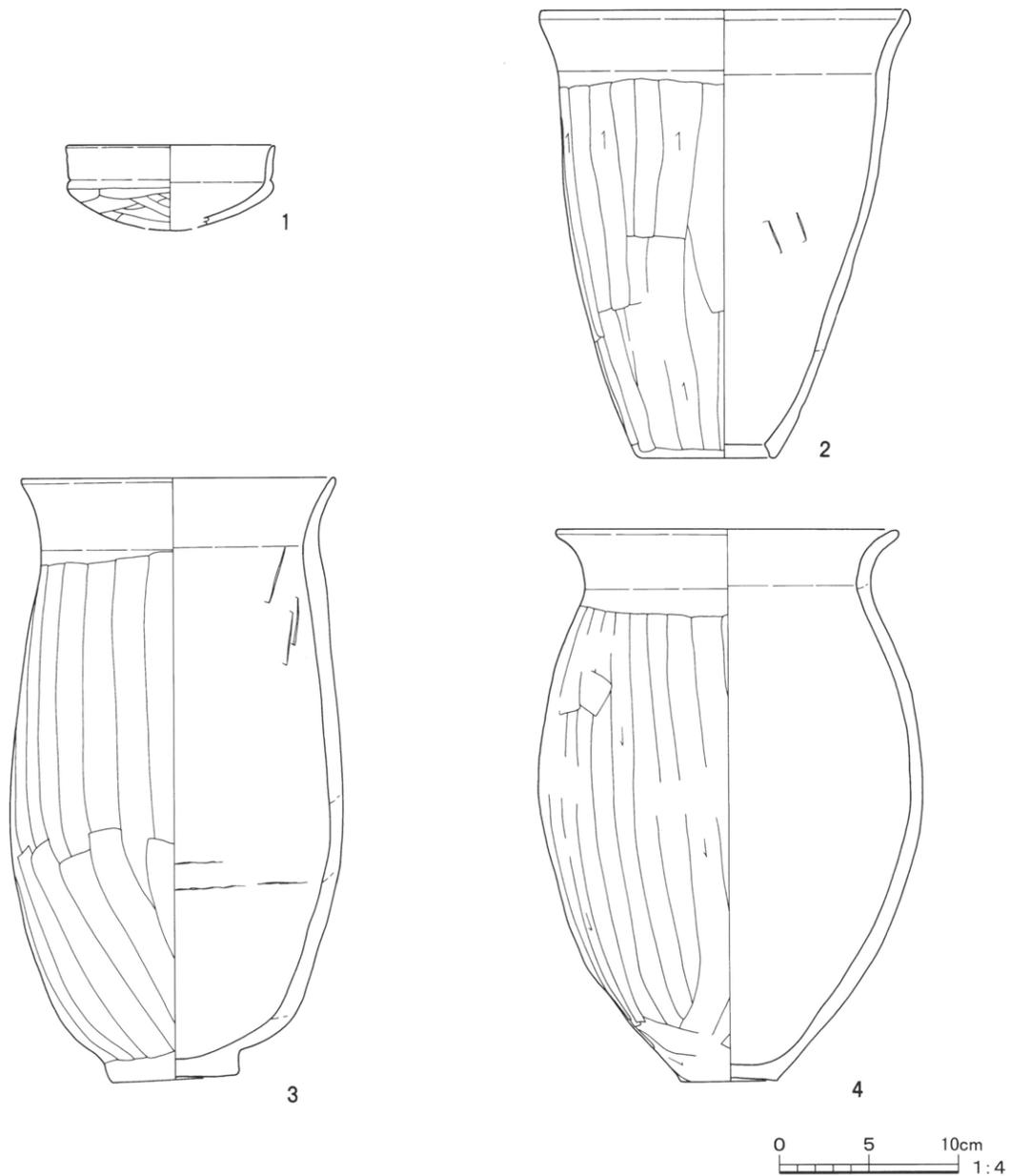


図30 SI-16 出土遺物

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 坏	口径 (11.7) 底径 — 器高 (4.7)	丸底。口縁部は体部との境に稜をもち、わずかにふくらみをもって直立する。	外面—口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ。	雲母・白色粒・ 黒色粒 内—橙色 外—明赤褐色	1/2。
2	土師器 甌	口径 20.9 底径 8.0 器高 25.0	胴部はふくらみが少ない。口縁部は外反ぎみに立ち上がり、端部でわずかに内彎する。	外面—口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	チャート・黒色 粒・褐色粒 内外—橙色	ほぼ完形。胴部外面黒斑。
3	土師器 甕	口径 (17.7) 底径 7.3 器高 33.6	平底。胴部は下位にわずかなふくらみをもち、直胴状を呈する。口縁部はわずかに外反して立ち上がる。	外面—口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ、底部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ、胴部～底部ヘラナデ。	チャート・黒色 粒・褐色粒 内外—にぶい 橙色	口縁部2/3欠損。胴部外面黒斑。
4	土師器 甕	口径 (19.3) 底径 (5.4) 器高 30.7	平底。胴部は中位にふくらみをもつ。口縁部は外反して立ち上がる。	外面—口縁部ヨコナデ、胴部～底部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ、胴部ナデ。	石英・黒色粒・ 粗砂粒 内—橙色 外— にぶい黄橙色	口縁部2/3・ 胴部一部欠損。

表 10 SI-16 出土遺物観察表

としてトレンチ調査の方法がとられた調査区中央～南西部に位置しており、調査方法上の制約から、住居跡と認定はされたものの、個別の遺構としてそれ以上の詳細かつ有意な情報を持ち合わせていない。本項では、個別の事実記載を行わない代わりとして、12軒の住居跡について規模や形状などに関する摘要を表9にまとめ、覆土より出土した遺物を別途掲載する。

SI-16 出土遺物 (図30、表10)

いずれも土師器である。1は坏。口縁はおおむね直立するが、わずかに外傾する。2は甕形の甑。3・4は甕である。ともに胴部中位が最大径となる。総じて6世紀前葉の所産と考えられる。

SI-17 出土遺物 (図31、表11)

いずれも土師器である。埴、高坏、台付甕といった器種構成、およびの高坏(図31-2)の坏部下に稜が見られる点から、5世紀中葉の所産と考えられる。

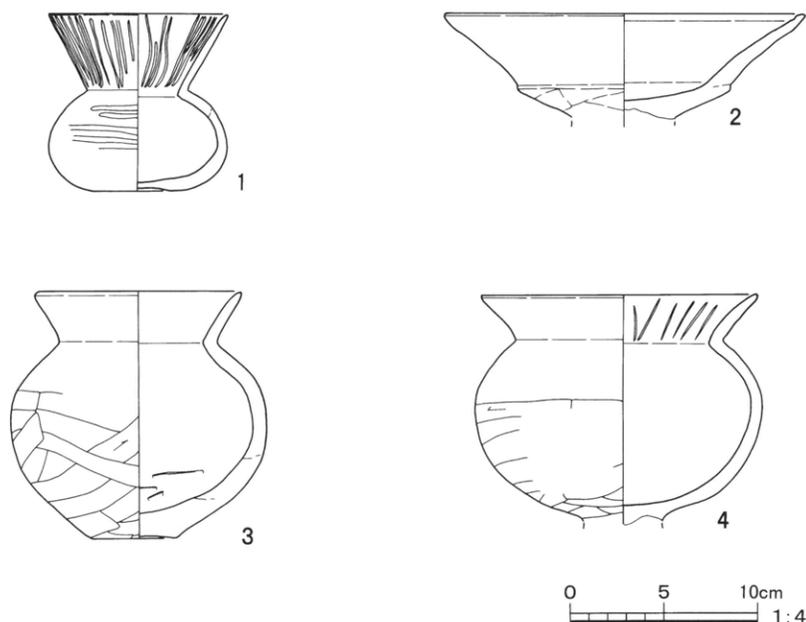


図31 SI-17 出土遺物

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 埴	口径 (9.4) 底径 3.5 器高 9.4	上げ底。体部は中位に大きなふくらみをもつ。口縁部は直線的に開く。	外面-口縁部ヨコナデ後ミガキ、体部ナデ後ミガキ、底部ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ後ミガキ、体部~底部ナデ。	白色粒・黒色粒 内外-にぶい 褐色	2/3。
2	土師器 高坏	口径 (19.2) 底径 - 器高 -	坏部下に稜をもつ。口縁部は外反ぎみに開き、端部は内彎する。	外面-口縁部ヨコナデ、坏部下位ヘラナデ。内面-口縁部ヨコナデ、坏底部ヘラナデ。	白色粒・黒色粒 内外-明赤褐色	坏部3/4残存。
3	土師器 小型甕	口径 (11.1) 底径 4.4 器高 13.1	平底。胴部は中位にふくらみをもつ。口縁部は外反ぎみに開く。	外面-口縁部ヨコナデ、胴部~底部ヘラケズリ後、胴部上位ナデ。内面-口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	チャート・黒色粒 内外-にぶい 赤褐色	口縁部3/4欠損。
4	土師器 台付甕	口径 (14.7) 底径 - 器高 -	胴部は中位にふくらみをもつ。口縁部は外反して開く。	外面-口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ後、上位ナデ。内面-口縁部ヨコナデ後ミガキ、胴部~底部ナデ。	石英・黒色粒 内-暗赤褐色 外-明赤褐色	口縁部~胴部2/3残存。

表11 SI-17 出土遺物観察表

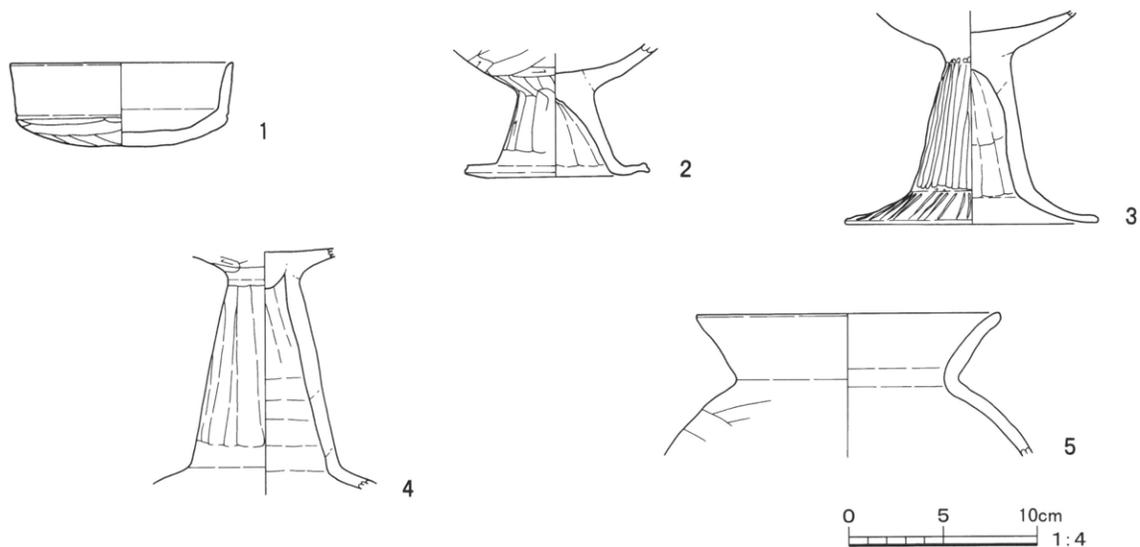


図32 SI-22 出土遺物

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 坏	口径 (11.9) 底径 — 器高 4.4	丸底。口縁部は体部との境に稜をもち、直立ぎみに立ち上がる。	外面—口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラナデ。	白色粒・黒色粒・粗砂粒 内—明赤褐色 外—橙色	1 / 3。
2	土師器 高坏	口径 — 底径 (9.8) 器高 —	坏部下位に明瞭な稜をもたない。脚部は直線的に開く。裾部は広がり、端部は反り上がる。	外面—坏部下位ヘラケズリ、脚部ヘラケズリ後、下位ヘラナデ、裾部ヨコナデ。内面—坏部下位～底部ナデ、脚部ナデ、裾部ヨコナデ。	雲母・チャート・黒色粒 内—明赤褐色 外—にぶい褐色	坏部下位～脚部 1 / 2 残存。
3	土師器 高坏	口径 — 底径 (13.4) 器高 —	脚部はわずかにふくらみをもち、裾部は広がる。	外面—坏部下位ナデ、脚部～裾部ナデ後ミガキ。内面—坏底部ナデ、脚部ナデ、裾部ヨコナデ。	雲母・石英・黒色粒 内—明赤褐色	脚部残存。
4	土師器 高坏	口径 — 底径 — 器高 —	脚部はわずかにふくらみをもつ。	外面—坏部下位ヘラケズリ、脚部ナデ、裾部ヨコナデ。内面—坏底部ナデ、脚部ナデ、裾部ヨコナデ。	白色粒・黒色粒 内—赤褐色 外—にぶい赤褐色	脚部 2 / 3 残存。
5	土師器 甕	口径 (16.2) 底径 — 器高 —	胴部は上～中位にふくらみをもち、口縁部は外反して開く。	外面—口縁部ヨコナデ、胴部上位ナデ・ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ、胴部上位ナデ。	白色粒・黒色粒・粗砂粒 内外—明赤褐色	口縁部～胴部上位 3 / 4 残存。

表12 SI-22 出土遺物観察表

SI-22 出土遺物 (図32、表12)

いずれも土師器で、5世紀末～6世紀初頭の所産と考えられる。1は坏。口縁はおおむね直立するが、わずかに外傾する。2～4は高坏の脚部。このうち2は短脚である。

(3) 主要な土坑

今回の調査では、24基の土坑が検出された。このうち20基は、規模・形状、さらに遺物または人骨を伴う点から、土壙(墓穴)と判断される。おおむね中世のものとみられる。本項では、比較的良好な検出状態にあった5基をとり上げる。

SK-01 (図34、表13)

位置：調査区北部に位置する。南部でSK-22による攪乱を受けている。主軸方位は、N-3°-Eである。
形状：最大残存長1.56m、短軸78cmを測る。遺構確認面において隅丸長方形、断面は凹字形を呈する。

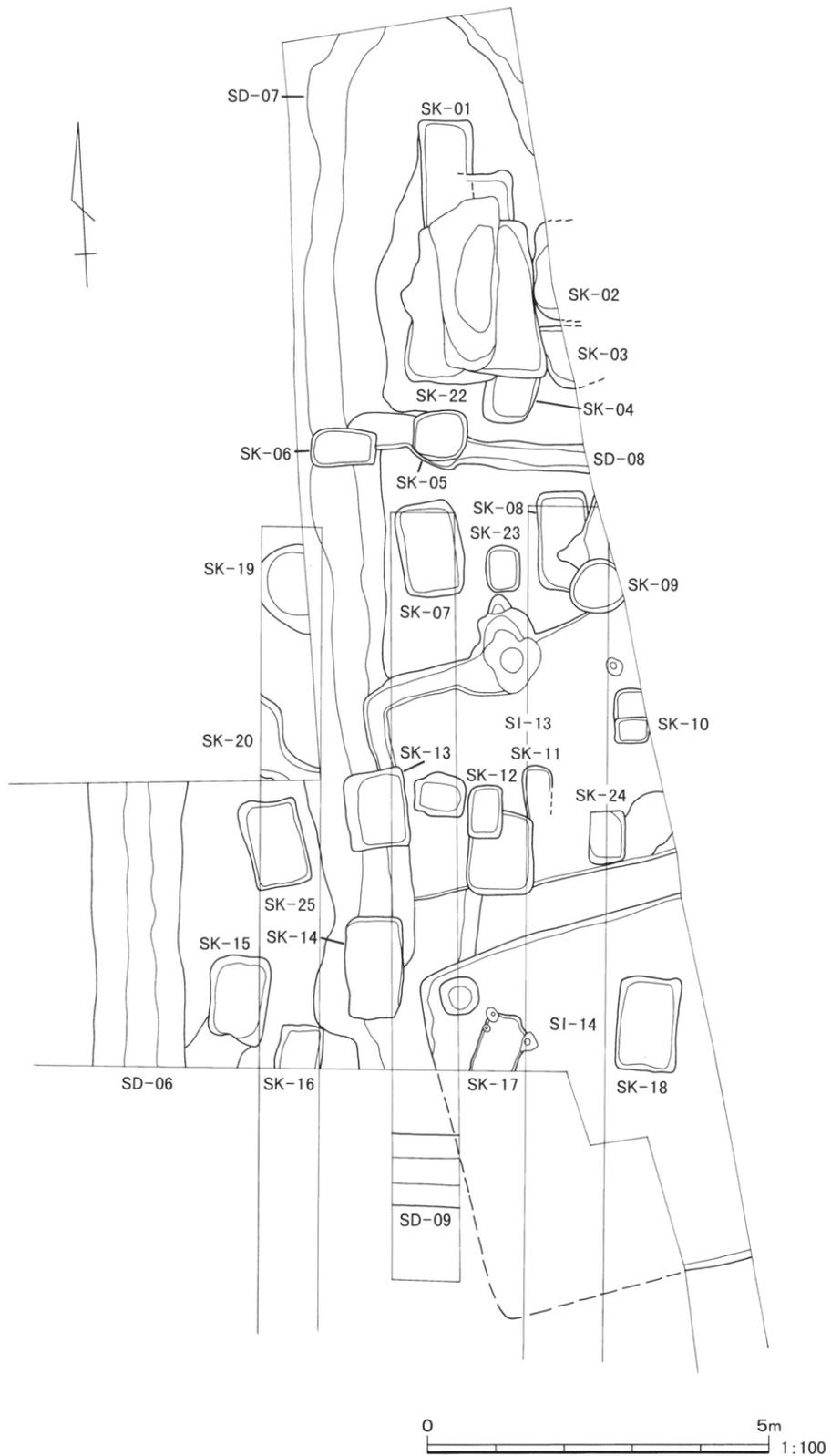


図33 調査区北部の遺構

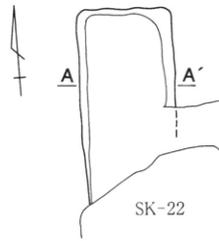


図34 SK-01

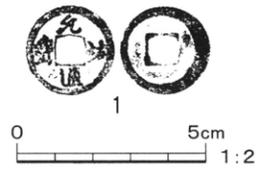


図35 SK-01 出土遺物

No.	種類	法	量 (cm・g)	備考
1	古 銭	銅銭	外径：2.4 孔径：0.8 厚さ：0.1 重さ：2.36	元祐通宝 初鑄年 1086年

表13 SK-01 出土遺物観察表

構造： 遺構確認面から底面まで、最深部にして26cmを測る。壁面は、80°前後の角度で外傾して立ち上がる。底面および壁面に、顕著な工具痕は認められない。

遺物： 覆土中より、古銭が1点出土している。1086年初鑄の元祐通宝である。

時期： 中世の土壌である可能性が高い。

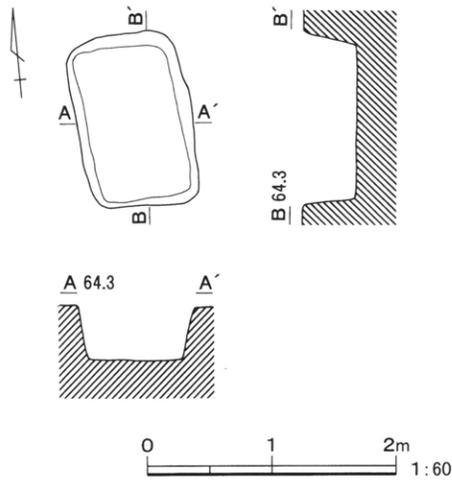


図36 SK-07

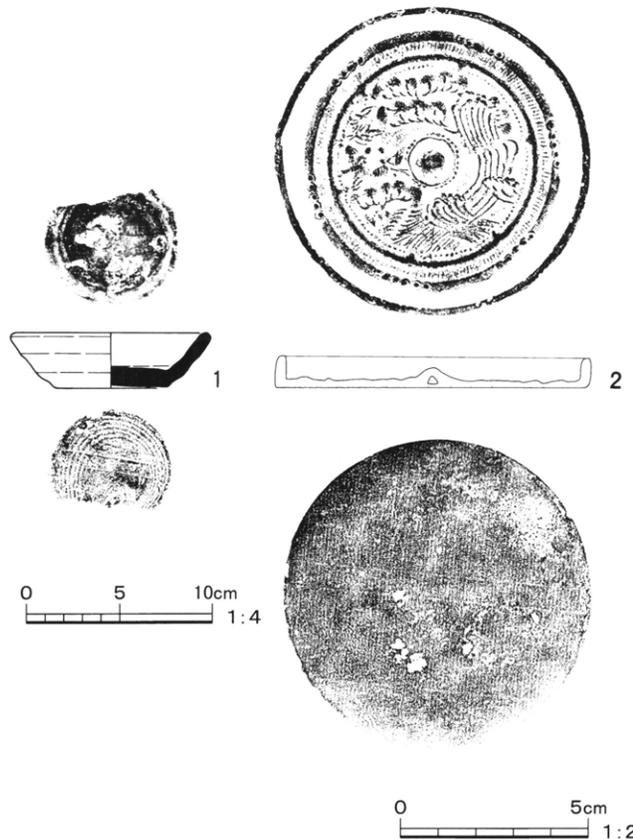


図37 SK-07 出土遺物

SK-07 (図36・37、表14)

位置： 調査区北部に位置する。主軸方位は、N-6°-Wである。

形状： 長軸1.40m、短軸92cmを測る。遺構確認面において隅丸長方形、断面は凹字形を呈する。

構造： 遺構確認面から底面まで、最深部にし

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	かわらけ 皿	口径 10.3 底径 5.8 器高 2.9	口縁部は内彎ぎみに立ち上がり、口唇部は肥厚する。見込周縁部くぼむ。	体部ロクロ整形。底部回転糸切り。	白色粒・黒色粒 内—にぶい黄橙色 外—黄橙色	ほぼ完形。近世か。
No.	器種	法量 (cm・g)				備考
2	和鏡	銅製 「蓬莱双雀鏡」 径：8.4 厚さ：0.2 重さ：98.55 菊座穹窿紐 中線二重圈（外側の界圈は部分的に珠文が施された特殊圈） 直角式中縁				完形。

表14 SK-07 出土遺物観察表

て44cmを測る。壁面は、80°前後の角度で外傾して立ち上がる。底面および壁面に、顕著な工具痕は認められない。なお、覆土上面には川原石が充填されていた。

遺物： 覆土中より、かわらけの皿と完形の和鏡が出土している。いずれも、中世末から近世初頭にかけての所産と考えられる。図37-1のかわらけは、厚手の器壁を有する。2の和鏡は、「蓬莱双雀鏡」と呼ばれるもので、銅製。外区に鋸歯文帯と圈線文帯がめぐり、内区には蓬莱文様があしらわれている。鎌倉時代末期に現れ、室町時代に入ってひろく流行したものである。

時期： 中世末～近世初頭の土壌である可能性が考えられる。

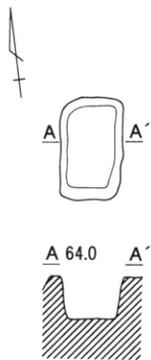


図38 SK-12

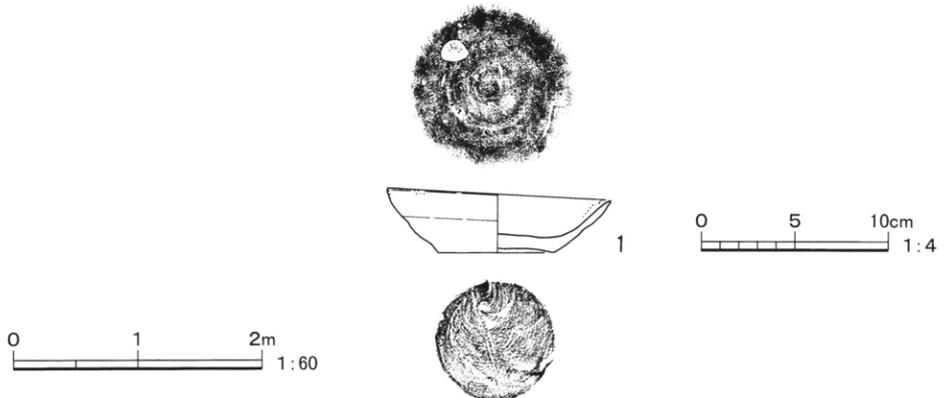


図39 SK-12 出土遺物

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	中世土器 かわらけ	口径 11.9 底径 6.2 器高 3.2	口縁部は内彎ぎみに立ち上がる。	体部ロクロ整形。底部左回転糸切り、板状圧痕。見込螺旋状ロクロ目。	金雲母・黒色粒 赤褐色粒 内—橙色 外—浅黄橙色	完形。口縁部内外面端部に煤付着。

表15 SK-12 出土遺物観察表

SK-12 (図38・39、表15)

位置： 調査区北部に位置する。主軸方位は、N-6°-Eである。

形状： 長軸 1.24m、短軸 95cmを測る。遺構確認面においておおむね隅丸長方形を呈し、断面は凹字形となる。

構造： 遺構確認面から底面まで、最深部にして34cmを測る。壁面は、80°強の急角度にて外傾しつつ立ち上がる。底面および壁面に、顕著な工具痕は認められない。

遺物： 覆土中より、土器が出土している。体部下半の微弱な屈曲、底部の調整技法などから、中世後半の所産と推測される。

時期： 中世の土壌である可能性が高い。

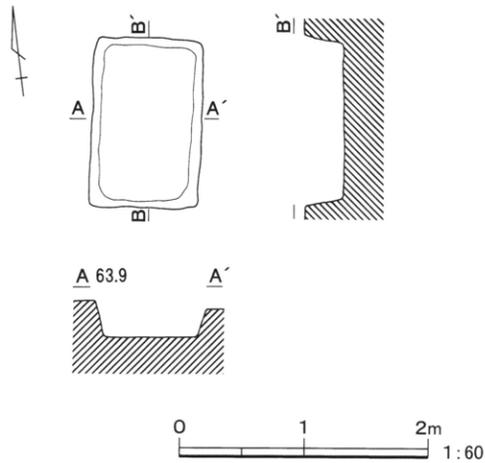


図40 SK-18

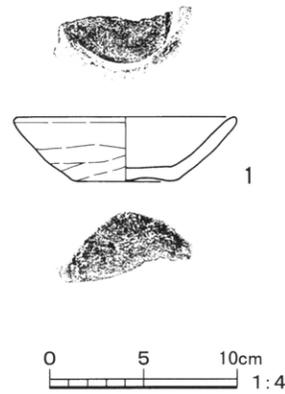


図41 SK-18 出土遺物

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	かわらけ皿	口径 (11.6) 底径 (5.8) 器高 3.3	口縁部はゆるやかに内彎しつつ立ち上がる。	外面-ヘラナデ。内面-ナデ。	雲母・白色粒・黒色粒 内-灰褐色 外-黒褐色	1/3。

表16 SK-18 出土遺物観察表

SK-18 (図40・41、表16)

位置： 調査区北部に位置する。主軸方位は、N-8°-Eである。

形状： 長軸 1.35m、短軸 87cm を測る。遺構確認面において隅丸長方形を呈し、断面は凹字形となる。

構造： 遺構確認面から底面まで、最深部にして 30cm を測る。壁面は、70~80° 強の角度にて外傾しつつ立ち上がる。底面および壁面に、顕著な工具痕は認められない。なお、覆土上面には川原石が充填されていた。

遺物： 覆土中より、土器が出土している。器壁の厚さなどの特徴から、中世末、または近世初頭の所産と推測される。

時期： 中世末~近世初頭の土壌である可能性が考えられる。

(4) その他の遺構

ここでは、前項まででとり上げなかった遺構の概略を示す。まず、土坑 19 基に関し、所見を一覧表にまとめて掲載し、このうち規模・形状などから土壌であると推測される 14 基を図示する。

土壌 14 基の模模をみてみると、長軸 1.49m、短軸 88cm、底面積約 1.30 m²を測る SK-14 が最も大きく、長軸 77cm、短軸 45cm、深さ 22cm の SK-10 が最も小さい部類に属する。

形状については、14 基中 8 基 (6 割弱) が、遺構確認面において隅丸 (長) 方形を呈している。さらに、このうち長軸・短軸比がおよそ 2 : 1 の細長い平面形となる例 5~6 基 (4 割前後) は、北頭横臥位の埋葬に供された可能性が高い。一方、長軸・短軸比が 1 : 1 に近い例も見受けられ、SK-05、SK-09、SK-13 の 3 基がこれに相当する。前出の SK-10 は、底に段を有し、SK-17 は性質不明ながら 2 基の小ピットを伴う。なお、SK-09 のような平面円形の土壌は、中世でも新しい時期、もしくは近世において多くの類例が認められるものである。

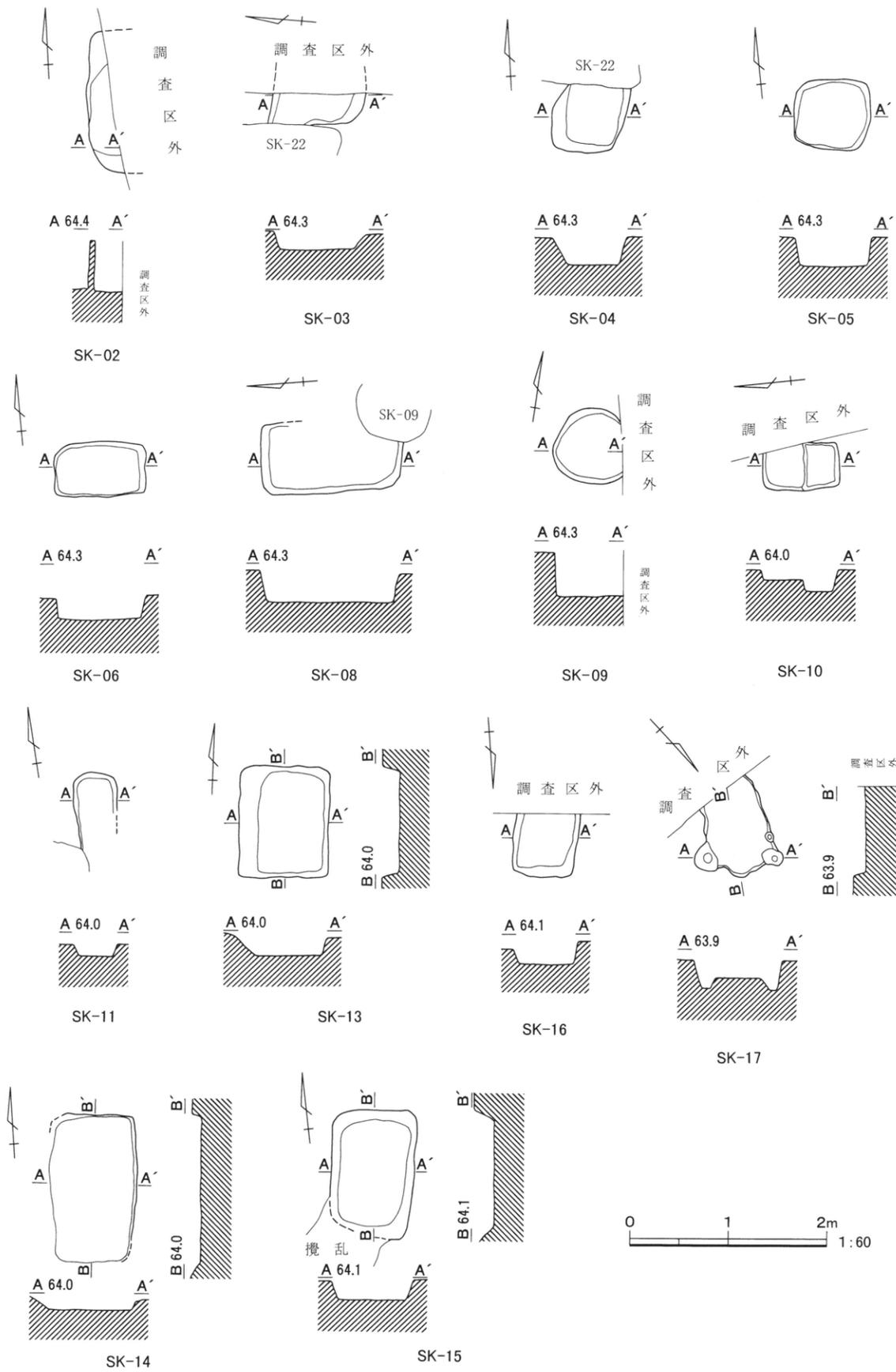


図42 その他の土坑

遺構名	形 状		規 模 (cm)			主軸方位	備 考
	平面形	断面形	長 軸	短 軸	深 さ		
SK-02	—	凹字形か	[141]	(40)	52	N-86°-W	土壇
SK-03	—	浅い凹字形	90	(33)	18	N-80°-E	土壇、SK-21に切られる
SK-04	隅丸方形か	凹字形	(69)	76	29	N-13°-E	土壇、SK-21に切られる
SK-05	隅丸方形	凹字形	84	74	31	N-6°-E	土壇
SK-06	隅丸長方形	凹字形	92	56	24	N-85°-W	土壇
SK-08	隅丸長方形	凹字形	143	71	34	N-2°-E	土壇
SK-09	円形	凹字形か	(69)	77	45	N-73°-W	土壇
SK-10	隅丸長方形	凹字形(段差あり)	77	45	22	N-3°-E	土壇、底面に段を有する
SK-11	隅丸長方形か	浅い凹字形	(77)	45	12	N-2°-E	土壇
SK-13	隅丸長方形	浅い凹字形	113	91	22	N-4°-W	土壇
SK-14	隅丸方形	浅い凹字形	149	88	13	N-3°-E	土壇
SK-15	隅丸方形	凹字形	130	84	20	N-11°-E	土壇
SK-16	隅丸方形か	浅い凹字形	(67)	64	23	N-12°-E	土壇
SK-17	不整楕円形	浅い凹字形	(99)	63	30	N-25°-E	土壇、小ピット2基を伴う
SK-19	円形か	—	(127)	103	—	N-39°-W	土壇
SK-20	不整形	—	(136)	[90]	—	N-43°-W	土壇
SK-21	不整形	凸レンズ状	309	204	109	N-2°-E	—
SK-22	隅丸長方形	浅い凹字形	68	47	11	N-0°	—
SK-23	隅丸長方形か	浅い凹字形	78	48	33	N-4°-E	—
SK-24	隅丸長方形	凹字形	130	86	65	N-9°-W	—

表17 その他の土坑一覧表

そのほか、今回の調査では9条の溝状遺構が検出されている。東西を向くSD-08・09を除き、7条がおおむね南北方向にのびており、互いに平行に位置する2～3条が1組となる傾向が認められる。他遺構との重複関係からは中近世の可能性も考えられるが、いずれの溝状遺構も伴出遺物はほぼ皆無であり、遺構の性格及び帰属時期は不明である。あるいは、複数の時代・時期のものが混在しているのかもしれない。

V ま と め

今回実施された社具路遺跡第4地点の発掘調査は、これまでも数地点にわたって行われてきた同遺跡のうち、西側にて第10地点とも隣接する箇所1,984㎡を対象としたものであった。調査の結果、古墳時代中期から奈良・平安時代までにわたる住居跡群と、中世を主体とする土壌群が検出された。

28軒を数える竪穴住居跡については、時期不詳とした例が多く、このため時期別の詳細な集落の設営状況を復元するには至らない。覆土中出土遺物が5世紀中葉に属するSI-17が最も古いと考えられ、またSI-13は規模・形状、付帯施設の特徴、加えて伴出遺物の内容からも、今回調査された中では最も後出の様相を帯びている。これら2軒の中間の時期に他の住居跡が相前後して構築・廃絶されたものとみて大過ないであろう。

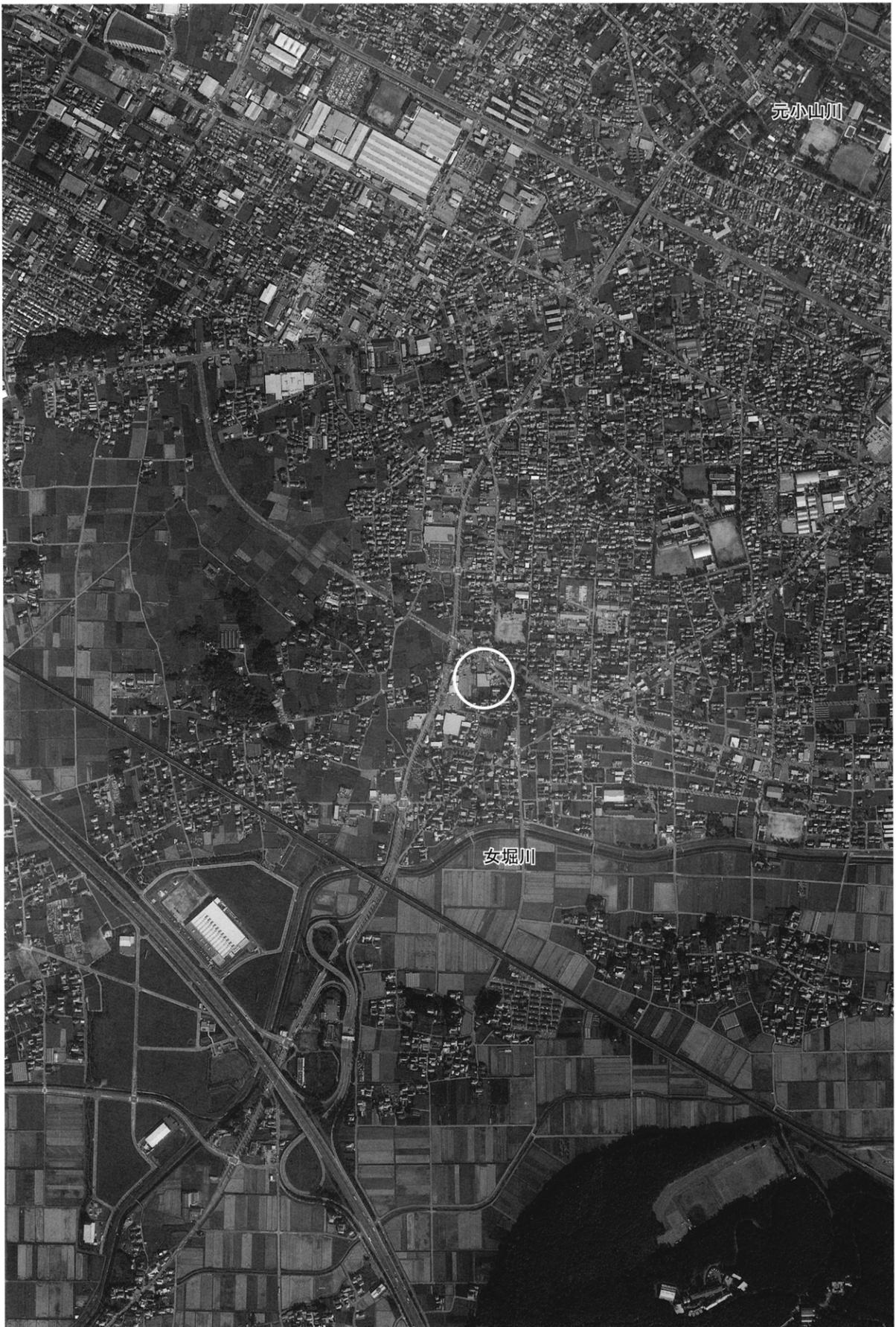
20基を数える土壌は、一部近世に属する可能性をもつものが含まれているが、中世において構築されたものが大勢を占めると見なされる。伴出遺物が皆無、もしくは僅少な例が多い当該遺構にあって、合計9体分と推計される骨片や歯牙に加え、土器少量、北宋銭などの出土をみた。とりわけ、SK-07にて検出された和鏡(蓬莱双雀鏡)は遺存状態も良好であり、当該期の葬制の一端を垣間見せる資料として特筆に価する。これらの土壌の性質について、墓という以上の踏み込んだ解釈を与えることは難しい。ただ、板碑や石塔が設置された痕跡が一切見当たらない点などから、現状では一般庶民の墓地とみるのが妥当かと思われる。

なお、本調査終了後、北隣りの箇所が第6および第13地点として相次いで調査され、複数地点の調査成果を総合して往時の集落のあり方を検証する方途が、徐々にではあるが開かれつつある。本遺跡周辺地域における調査事例のさらなる集積をまち、結語としたい。

主要参考文献

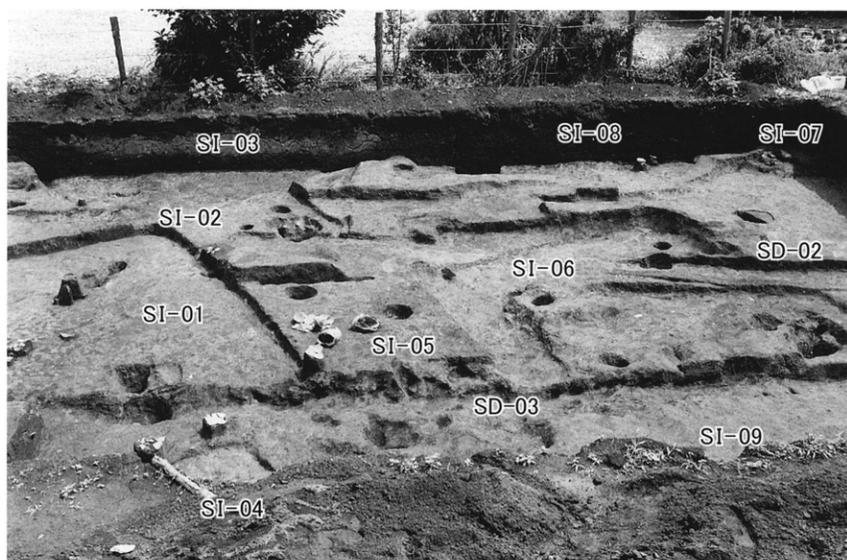
- 中野政樹 1969 『日本の美術 第42号 和鏡』 至文堂
- 本庄市 1976 『本庄市史 資料編』
- 谷 旬 1982 「古代東国のカマド」『千葉県文化財センター紀要』7 (財)千葉県文化財センター
- 本庄市教育委員会 1983 『埼玉県本庄市 二本松遺跡発掘調査報告書』
- 坂本和俊 1984 「埼玉県」『古墳時代土器の研究』古墳時代土器研究会
- 本庄市教育委員会 1985 『埼玉県本庄市 夏目遺跡発掘調査報告書』
- 本庄市 1986 『本庄市史 通史編 I』
- 井上尚明 1986 『将監塚・古井戸 古墳・歴史時代編』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 本庄市教育委員会 1987 『埼玉県本庄市 東富田遺跡群発掘調査報告書』
- 赤熊浩一 1988 『将監塚・古井戸 歴史時代編』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 本庄市教育委員会 1997 『市内遺跡発掘調査報告書～西富田地区編～』
- 古代生産史研究会ほか 1997 『東国の須恵器—関東地方における歴史時代須恵器の系譜—』
- 高橋泰子 1999 「貯蔵穴の研究—武蔵野国豊島郡内の竈付き竪穴住居跡にみられる貯蔵穴の分析について—」『土壁』第3号 考古学を楽しむ会

写 真 图 版

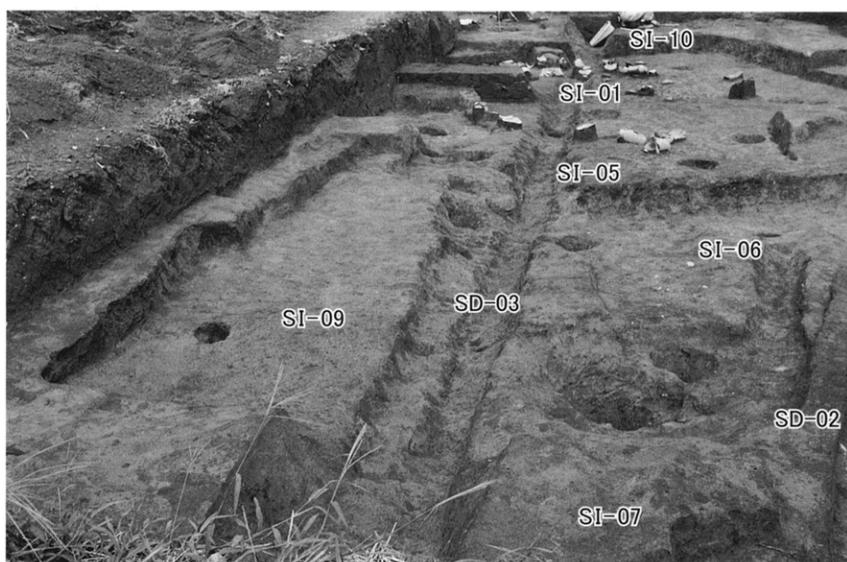


遺跡の位置および周辺の地形

(国土地理院、2000年10月撮影)



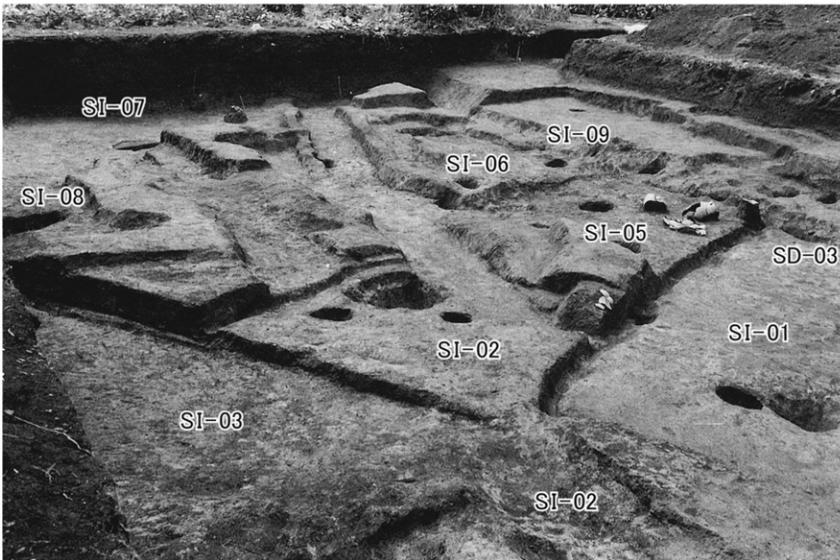
調査区南東部 住居跡など
(1) 西から



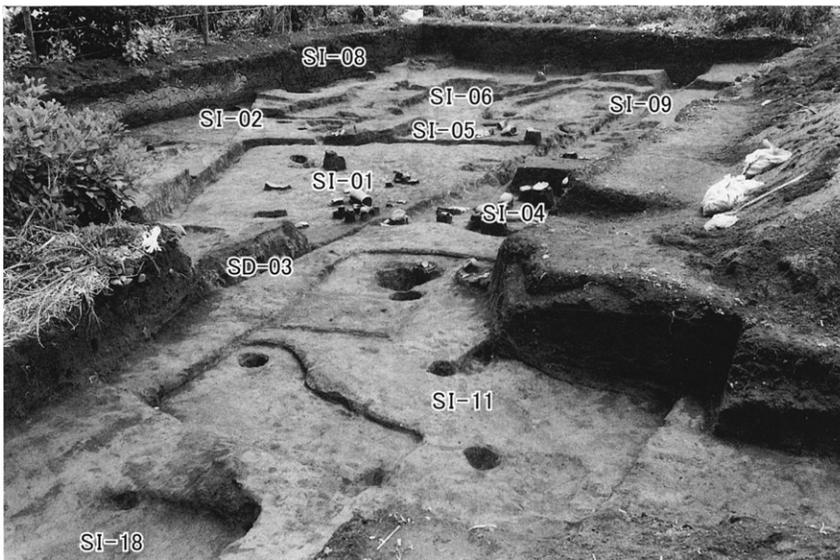
調査区南東部 住居跡など
(2) 南から



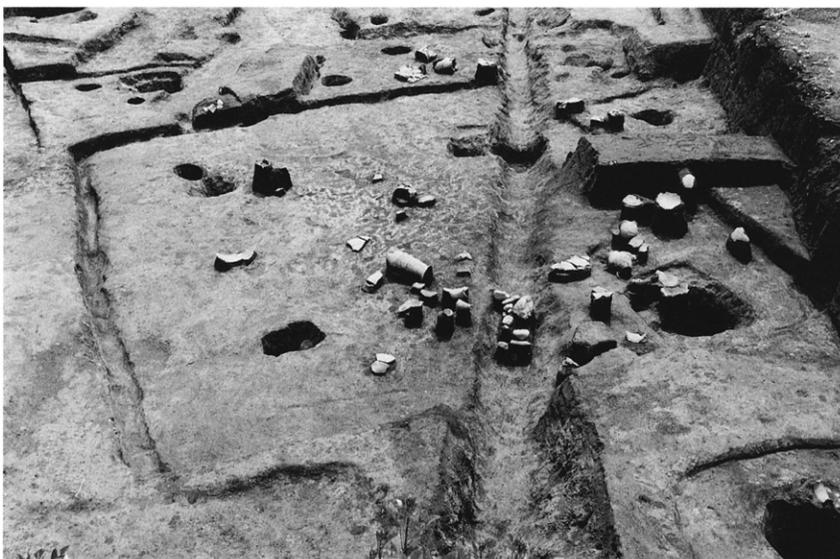
調査区南東部 住居跡など
(3) 東から



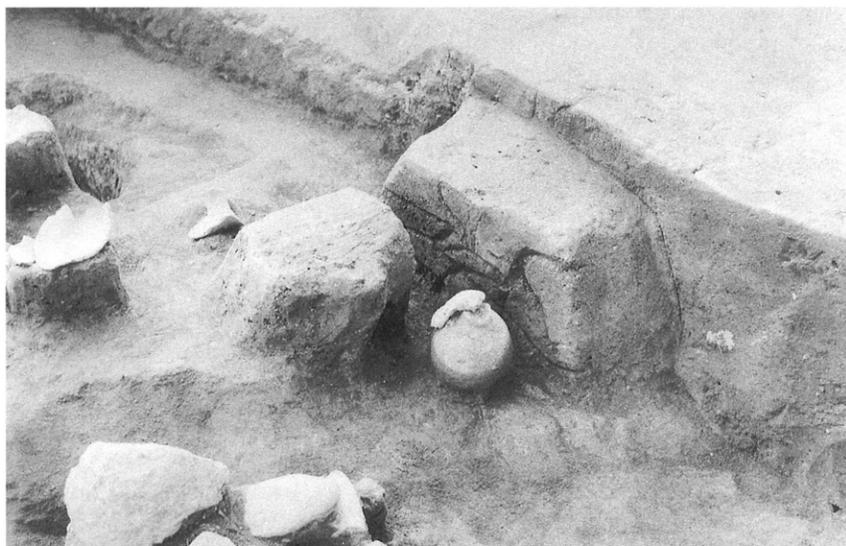
調査区南東部 住居跡など
(4) 北東から



調査区南東部 住居跡など
(5) 北西から



SI-01



SI-01 カマド周辺



SI-01 遺物出土状況(1)



SI-01 遺物出土状況(2)



SI-04 カマド (1)



SI-04 カマド (2)



SI-04 遺物出土状況



SI-05 遺物出土状況



[左] SI-07
[右] SI-08



SI-11



SI-11 遺物出土状況



〔左〕 SI-28

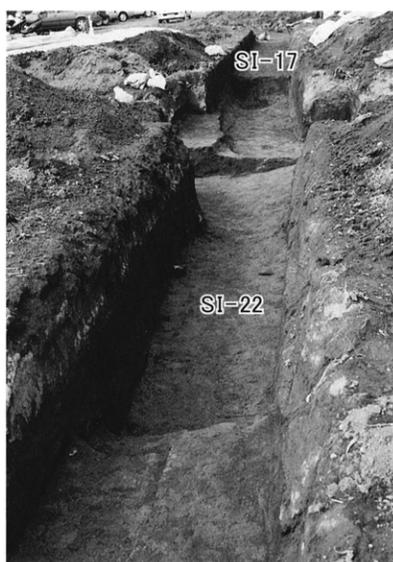
〔右〕 SI-26



SI-13 カマド周辺



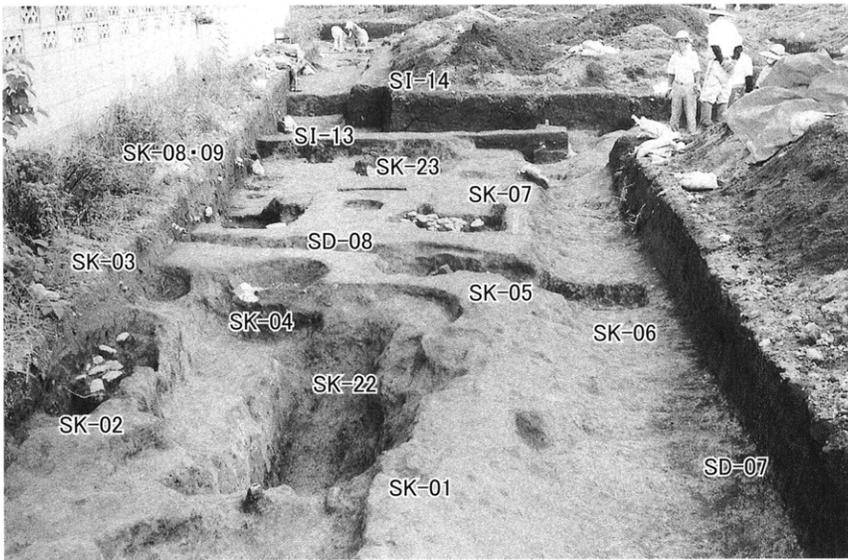
SI-20



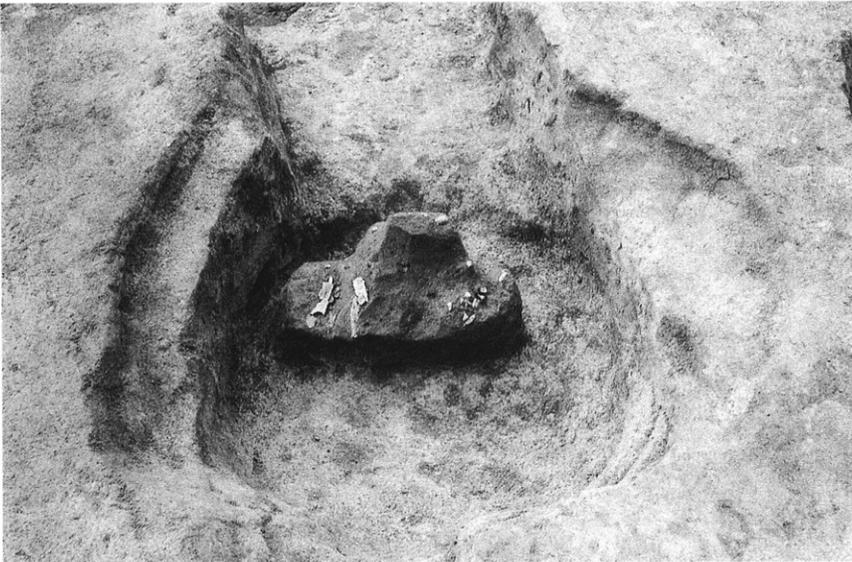
[左] SI-22・17
[右] SI-27



SI-13 周辺



調査区北東部
住居跡・墓など 北から



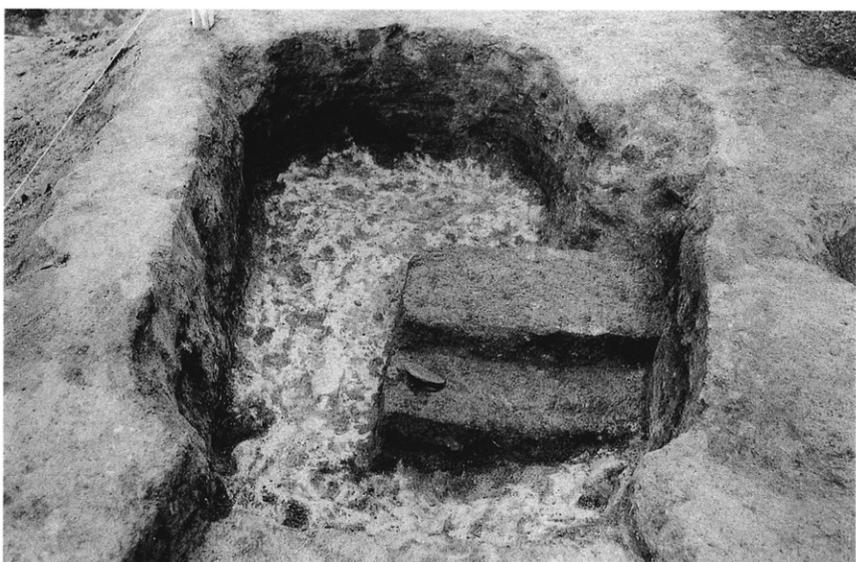
SK-05 (1)



SK-05 (2)



SK-07 (1)



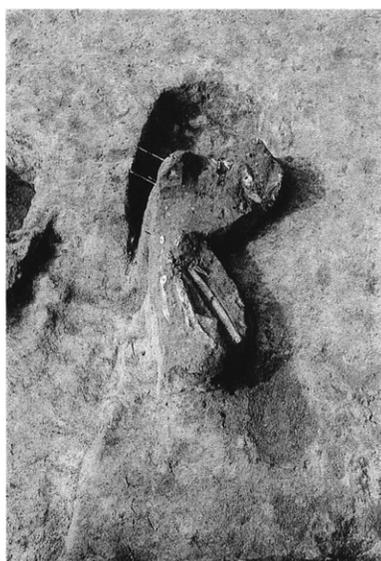
SK-07 (2)



SK-08・09



SK-11 (1)



SK-11 (2)·(3)



SK-11 (4)



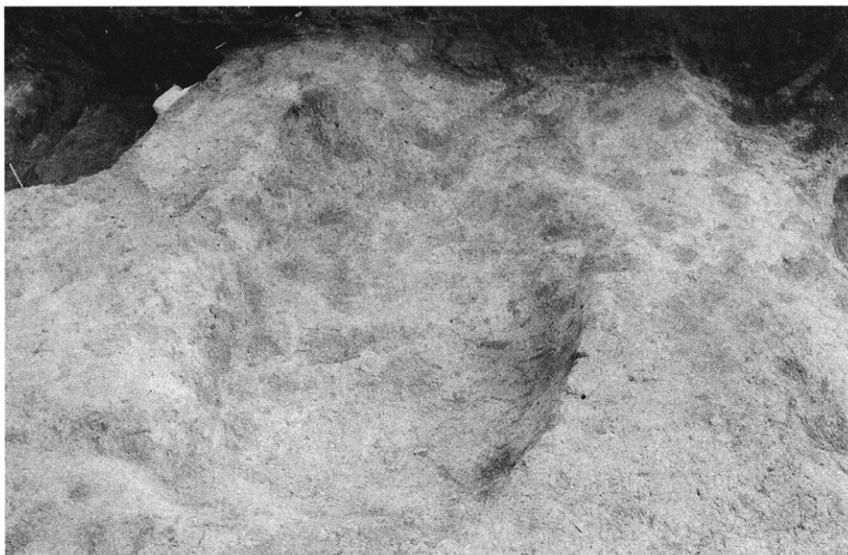
SK-12



SK-13 (1)



SK-13 (2)



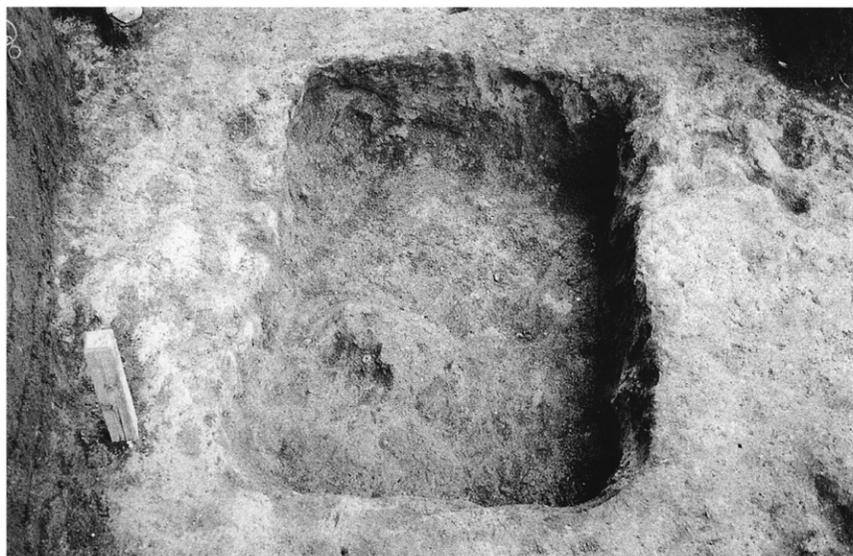
SK-15



SK-16



SK-18 (1)



SK-18 (2)



SK-22



SD-02



SD-06



作業風景 (SI-01)



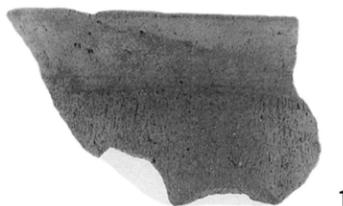
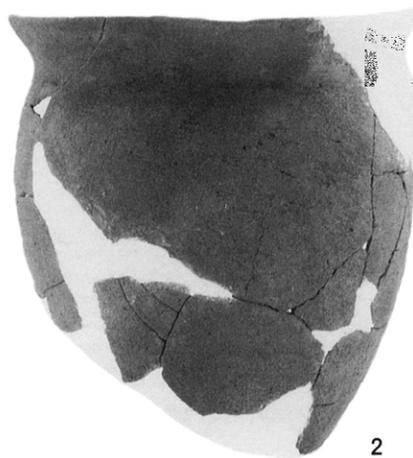
SI-02 出土遺物

SI-07 出土遺物



SI-01 出土遺物

SI-11 出土遺物



SI-13 出土遺物

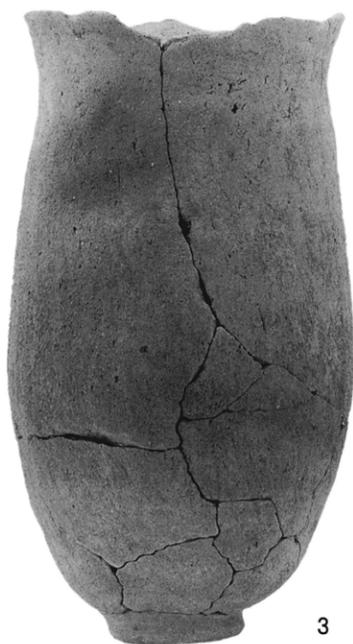
SI-14 出土遺物



1



2



3



4

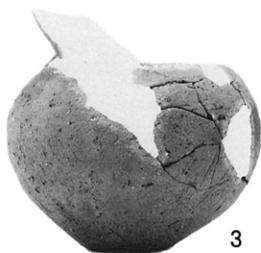
SI-16 出土遺物



1



2



3

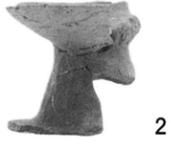


4

SI-17 出土遺物



1



2



3



5

SI-22 出土遺物



1

SI-25 出土遺物



SI-28 出土遺物

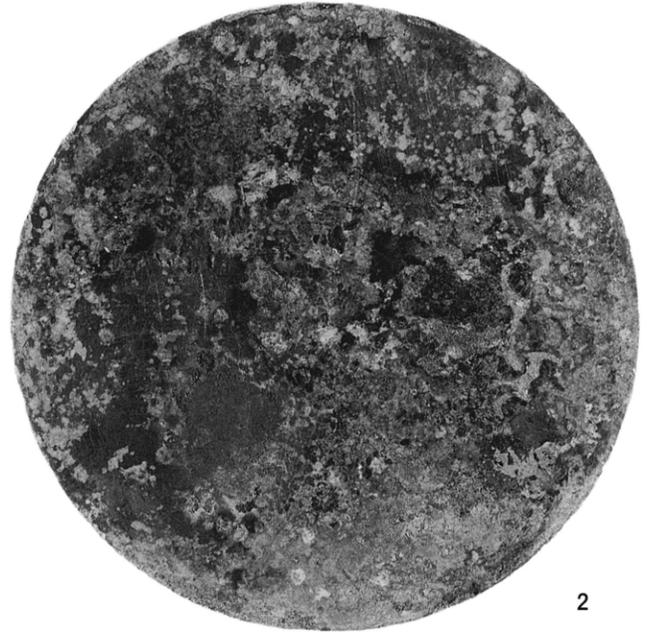


1

SK-01 出土遺物



1



2

SK-07 出土遺物

(2の和鏡のみ S=1/1、他は挿図と同様の縮尺)



1

SK-12 出土遺物



1

SK-18 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	しゃくじいせきだいよんちてん							
書名	社具路遺跡 第4地点							
副書名	店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	本庄市遺跡調査会報告							
シリーズ番号	第7集							
編著者名	和久 裕昭 有山 径世							
編集機関	本庄市遺跡調査会							
所在地	〒367-8501 埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号 本庄市教育委員会内 TEL 0495-25-1186							
発行年月日	西暦 2004(平成16)年 3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しゃくじいせき 社具路遺跡 だいよんちてん 第4地点	さいたまけんほんじょうし 埼玉県本庄市 おおあぎにしとみだあぎ 大字西富田字 かなさら 金鑽409番1 他	53	093	36° 13' 49" 36° 13' 37"	139° 10' 10" (新座標・世界測地系) 139° 10' 22" (旧座標・日本測地系)	1997 08 11 ~ 2004 03 31	1,984m ²	店舗建設
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
社具路遺跡 第4地点	集落跡 墓地	古墳時代後期 ～中・近世	竪穴住居跡28軒、土塙 (墓穴)20基、土坑4基、 溝状遺構9条		土師器、和鏡			

本庄市遺跡調査会報告 第7集

社 具 路 遺 跡
—第4地点—

店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成16年3月25日 印刷

平成16年3月31日 発行

発行／本庄市遺跡調査会

〒367-8501 埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号

本庄市教育委員会内

電話 0495-25-1186

印刷／朝日印刷工業株式会社

